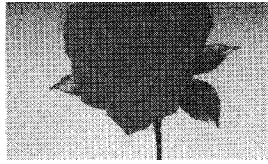
聖徒の道 1980年12月号(第11巻第12号)(通巻124号)〒120円 昭和52年12月18日 第3種郵便物認可

聖徒の道

12 1980



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会
スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会
エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧　問
M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー
F・エンツィオ・ブッシェ

国際機関誌
編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
キャロル・モーゼス
子供の頁編集：
ハイデイ・ホルフェルツ
デザイナー：
ロジャー・ギリング

もくじ

天父のみ業に携わる……N・エルドン・タナー…… 1
我が家のクリスマス……エミリー・スミス・スチュワート・ 6
朗読劇：「大きな使命」……ジーン・S・マーシャル …… 8
質疑応答……10
花ひらいたワード部音楽プログラム……ルース・リース……12
純潔――力の源……スティーブ・ギリランド……15
イエスさまも子どもでした……21
クリスマス生まれの弟……シェリー・ジョンソン……23
おかしな動物たち……マリー・プリングル……26
おもちゃばこ……28
日々の恵み……29
愛がなければ私たちはむなしい……マリアーン・マイアーズ……32
愛の贈り物……エレン・ジェンセン……35
「私の意見を聞いても笑わない人と話し合ってみたかった」……デビッド・キャプロン……36
あなたの心に尋ねてみなさい…ジャック・H・ゴーズリンド・ジュニア・41
ローカル・ニュース……44

聖徒の道12月号
発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5―10―30
印刷所　株式会社　精興社
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4―9―19
定　価　年間予約1,700円　1部150円
海外予約1,700円
INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0529 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号　東京0―41512
口座名　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

一番の贈り物

天父のみ業に携わる

副管長
N・エルドン・タナー

この聖なる季節の喜びを，皆さんや皆さんの愛する人々と共にすることができて大変うれしく思います。

私は今，神殿の中で教えておられた救い主が父ヨセフと母マリヤにお答えになった言葉を思い出しています。その時，救い主は12歳でした。マリヤは，心配して3日間も捜し歩いたことを言います。「どうしてこんな事をしてくれたのです。ごらんなさい，おとう様もわたしも心配して，あなたを捜していたのです。」（ルカ2：48）それに対して，救い主からは御自身の使命を悟った答えが返ってきます。「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを，ご存じなかったのですか。」（ルカ2：49）

私たちは今，まさしく天父のみ業に携わっているわけですが，これほどまでに心に暖かいものと満足感を与えてくれる仕事がほかにあるでしょうか。

毎年この季節が来ると，私たちはイザヤ，ノア，エレミヤによって啓示された旧約聖書の予言の成就と，リーハイやニーファイ，ベンジャミン王など新世界の予言者たちによって告げられたしるしと予言が成就したことを祝います。ルカは，この聖なる誕生の様子を次のように簡潔に記録しています。

「ところが，彼らがベツレヘムに滞在している間に，マリヤは月が満ちて，初子を産み，

布にくるんで，飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからで

ある。……

すると主の御使が現れ，主の栄光が彼らをめぐり照したので，彼らは非常に恐れた。

御使は言った，『恐れるな。見よ，すべての民に与えられる大きな喜びを，あなたがたに伝える。

きょうダビデの町に，あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。

あなたがたは，幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが，あなたがたに与えられるしるしである』。

するとたちまち，おびただしい天の軍勢が現れ，御使と一緒になって神をさんびして言った，

『いと高きところでは，神に栄光があるように，地の上では，み心にかなう人々に平和があるように』。」（ルカ2：6—7，9—14）

振り返って見ると，この1年間，私たちは主の教会の歩みというまた別の予言の成就に思いを馳せてきました。今年1980年は，福音が回復されて150周年に当たりましたが，福音のメッセージを受け入れる人々はこれからも多くの祝福にあずかることができるでしょう。過去150年の間に，教会はわずか6名で発足したものが，今日では400万人を越えるまでに発展しました。ステーキ部の数は，オハイオ州カートランドで最初のステーキ部が組織されて以来飛躍的な勢いで増加し，現在は世界全体で1,000以上のステーキ部が組織されています。また宣教師の人数も，1830年には16名にすぎなかったものが，今日では3万人を越えています。1830年の設立以来，教会員が経験してきた様々なチャレンジは，私たちを将来に備えさせるためのものでした。

私たちの先祖が教会のために捧げた犠牲は注目に値するものです。私たちが現在あずかっている祝福は，多くの場合，初期の時代の聖徒たちが福音に従うという決意を貫き通した結果にほかなりません。この堅い決意と犠牲的な行為は，聖徒たちがグレート・ソルトレーク盆地で最初の年を過ごした時に見られました。入植したその冬の間，食糧は乏しかったにもかかわらず，聖徒たちの間には主への感謝と主に仕えようとの堅い決意があふれていました。

1847年12月25日，ソルトレーク盆地で迎えた初めてのクリスマスを，ロバート・ブリス兄弟は次のように記録しています。「……雪もほとんど消えて，いい天気だ。きょうは大砲の音で目を覚ました。この日，仕事をした人もいれば，楽しく1日を過ごした人もいた。……私は，イリノイ州を一緒に追われたかつての隣人のひとりを訪ね，素晴らしいクリスマスのごちそうにあずかった。しかし，家族のことを考えるとそう喜んではいられない。家族はまだ1,000マイルもの彼方におり，春が来るまで迎えに行けそうもない。」ブリス兄弟はこの後，どんな試練の中でも主が家族を守ってこられたこと，そしてこれからも，たとえどのような状況の中に置かれようと家族を養ってくださるのだという信仰を表わしています。

またひとりの若い姉妹はこのように記しています。

「盆地での最初のクリスマスは忘れない。皆いつものように仕事をした。男の人たち

は草を刈り集めた。雪が降っていたが，それでも地面はまだ硬くなっていなかったので，土地を耕す人もいた。ほとんど1日中すきで耕していた。クリスマスが土曜日にあたったので，私たちは翌日の安息日をお祝いの日とした。全員がとりでの中央に立っている旗竿のまわりに集合して，そこで集会を開いた。素晴らしい集会だった。神をたたえる賛歌を歌って，全員が開会の祈りに加わった。その日の話は今でも覚えている。感謝と喜びを表わす言葉だけがあった。思いやりのない言葉は一言も聞かれなかった。皆信仰を持ってこの大事業に取り組んでいたので，どの顔も希望に満ち，朗らかであった。集会が終わると，皆は互いに握手を交わし合った。うれし泣きする人もいたし，子供たちはとりでの中で遊んでいた。夜は草の火を囲んで，歌を歌った。

恐れず来たれ聖徒　　進み行けよ
その旅はつらくとも　恵みあらん
（讃美歌，23番）

その日の夕食はうさぎの肉を煮込んだものと少しのパンだった。父がうさぎを何羽か仕留めてきたので，それがごちそうになったのであった。皆たっぷり食べた。心からの平安とよい気持ちを感じたという点で，生涯でこれほど幸せなクリスマスはなかった。」

シオンを確立する途上にあって，クリスマスは心安まるひとときであり，同時にチャレンジの時でもありました。1847年の冬は，グレート・ソルトレーク盆地の中だけでなく，これから西へ向かおうとする聖徒たちにも，開拓者精神があふれていました。クリスマスの2日前に，十二使徒評議員会は次のような一般書簡を送っています。

「すべての末日聖徒を……〔ミズーリ〕川の東岸にただちに集合させていただきたい。……金銭や家財，身回り品を持ってできるだけ速やかに集合するように。またついでながら，今大量に必要としている元気のよい牛も可能な限り集めていただきたい。牛は先々売りに出すこともできる。出発できる人は皆，今からすぐにも山を越えるように。それが無理な聖徒たちは，直ちに現状改善のための仕事に取りかかるように。すなわち，最近引き払って空地になった所に穀物を栽培し，家畜を飼うのである。……一生懸命に働くならば……，子牛は成長してやがて荷車を引けるようになるであろう。順に代わって働くことによって，聖徒たちは自分の手で穀物その他の食料を生産し，また荷車を作ることができる。……このようにすれば，荷車や牛車，食料を速やかに，楽に手に入れることができる。」（ジェームズ・R・クラーク編，*Messages of the First Presidency*「大管長会メッセージ」1：329）

こうした雄々しく，忠実な聖徒たちが幾多の試練を受け，犠牲を払ってきたことを知って，私たちが現在あずかっている祝福に感謝しない人はいないでしょう。クリスマスのメッセージと贈り物はただひとつです。永遠の生命という贈り物に勝るものはありません。神のみもとにおいて家族が絶えることなく永遠に住むことができるというメッセージに勝る贈り物はないのです。この尊い贈り物にふさわしい者となるために，私たちは進んで自らの持つ賜を捧げる必要があります。神の王国を築くために，

私たちは自分の持つすべてのものを喜んで捧げなければなりません。主に対して，家族に対して，さらには地域社会に対して自身を捧げる必要があるのです。

ほとんどの人に，これだけは忘れられないという心に残るクリスマスがあると思います。しかし多くの人にとって，そのクリスマスは高価な贈り物や休暇とはほど遠いものです。しみじみと心に残るクリスマスと言えば，やはり相手を思いやる心が通い合ったクリスマスではないでしょうか。それは，子供が初めて描いた絵であったかもしれませんし，感謝の言葉を記した隣人からのクリスマスカードであったかもしれません。また，おじいさんからの励ましの手紙や，揺り椅子にもたれて母親と一緒にクリスマスの歌を歌ったこと，父親に救い主の誕生の物語を読んでもらったことかもしれません。私たちは昔のクリスマスや，先祖の救い主に対する献身の物語からたくさんのことを学ぶことができます。毎年この季節になると，私たちは救い主の誕生を祝いますが，その救い主は，救い主のためにみ業に携わる私たちをいつも支えて下さいます。私たちは，今のこの時代が，私たち自身にとっても，家族や教会にとってもチャレンジの時代であることを常に認識する必要があります。福音で言うところの平安は，物質的な豊かさから得られるものではありません。私たちがその誕生をお祝いする御方，すなわちイエス・キリストの使命に対する証を持ってこそ得られるものなのです。私たちは，皆さん一人一人がクリスマスの意味を理解し，尊重されるように願っています。神は生きておられます。そして，皆さん一人一人をその奉仕の気持ちの故に愛しておられます。皆さんは御父のみ業に携わっています。これは主に捧げることのできる何よりの贈り物です。私たちはこれらのことを皆さんに知っていただきたいと思っています。

私の兄弟姉妹である皆さんに証を述べたいと思います。私たちは本当に幸せなことに，神が生きておられ，自分が神の霊の子供であること，また「神はそのひとり子を賜わったほどに，この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで，永遠の命を得るためである」（ヨハネ３：16）ことを知っています。それは，私たちに不死不滅と永遠の生命を得させるために，神の御子イエス・キリストが命を犠牲にされたことを知っているからです。主はこのように言っておられます。「これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」（モーセ１：39）

私たち一人一人が，自分自身が何者であるのか，イエス・キリストは私たちのためにどのような犠牲を払って下さったのかをはっきりと理解できるように願っています。そして，この人生を日々，救い主の偉大な犠牲にふさわしく生きようではありませんか。楽しいクリスマスと新年を過ごされますように。また新しい年をクリスマスの精神をもって送られるよう，イエス・キリストのみ名によりへりくだりお祈り致します。アーメン。

我が家のクリスマス

エミリー・スミス・スチュワート

私たちはクリスマスをかけがえのないものと思っています。生家のジョージ・アルバート・スミス家にとって，クリスマスは年一番と言ってよいほど祝福に満ちた貴重な日々でした。私たちは年毎の自分たちのクリスマスを，その昔両親がしてくれたように愛にあふれる生きたクリスマスにしようと努めています。

我が家のクリスマスの準備は，決まって特別なものでした。幅広く念入りに計画を立て，予算を組み，苦心して贈り物を選びました。父母は口癖のように，クリスマスで使う物は，お金であれ食べ物であれ，自分たちのためではなく，ほかのいろいろな人たちのために使うものだと言っておりました。「受けるよりは与える方が，さいわいである」ことを，私たちが自分で悟るようにという計らいだったのでしょう。手始めは母が扶助協会のために用意するすてきな箱でした。母はその中に，私たちで決めたプレゼントをみんな入れるのです。私たちは何日もかかってその箱に入れるものを集めました。そして用意万端整うと，箱をそりに載せ，カチカチに凍った雪の上を引いて第17ワード部の扶助協会室へ運びました。こうして我が家恒例のクリスマス行事が始まるのですが，忘れられがちな人々にお祝いをするのはいつも父の仕事でした。父は，人からお祝いが受けられる人には，物を差し上げなくても真心からの挨拶があれば十分だ。寂しい人たちにこそプレゼントやごちそうを贈るのだと考えておりました。

父はいつも私たちを連れて，寄る辺ない友人たちの家を見舞いました。クリスマスには毎年決まって訪ねることにしていたのです。父と一緒にそうして出かけた時，私はまだほんの子供でした。貧しい家が立ち並ぶ長い裏通りを歩いたことが，今でも思い出されます。1軒の小さな家のドアを開けると，ベッドに老婦人がひとりぼっちで寂しそうに寝ていました。私たちが入って行くと彼女のほおに涙が伝いました。そして私たちがささやかなプレゼントを差し上げると，彼女は身を伸ばして父の手を握り，言いました。「おいで下さって本当にありがとう。あなたが来て下さらなかったら，私にはクリスマスがないはずでした。

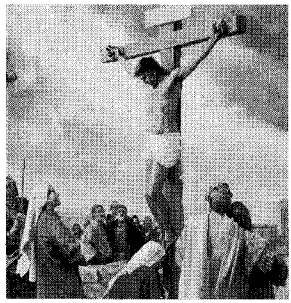
私のことを覚えていてくれる人なんぞ，ほかにだれもいないのですよ。」こうして私たち3人は楽しいクリスマスのひとときを過ごしました。

いつまでも忘れることができないのは，父が重い病気に伏せていた時のクリスマスです。出費が大変かさんで，いつものようなクリスマスをする余裕はとてもなさそうでした。母は例年通りの楽しいクリスマスをぜひしたいと思いましたが，クリスマスをいつものように祝って，しかも年内に什分の一を納めるのは無理だと承知していました。父が病気だったので什分の一が滞っていたのです。母は，子供たちは人並みに楽しいクリスマスを過ごして当然だと考えていましたが，プレゼントやごちそうを揃えれば什分の一を納めることは不可能でした。什分の一を完全に納めたら，子供たちはクリスマスができないのです。難しい選択でしたが，母はついに決めました。子供たちに何かしてやりたいという気持ちに負けそうになってしまうので，あれこれ考える前にまず什分の一を納めてしまうことにしたのです。母は急いでショールを掛け，監督の家へ行って，什分の一を納めてきました。

その帰り道，母の心は沈んでいました。クリスマスなのに子供たちには何もあげられないのです。子供たちのがっかりする顔を見るのが怖い気持ちでした。母がうなだれて雪道を歩いて行くと，近所で親しくしているマーク・オースチンさんに声をかけられました。「ちょっと，ちょっと，スミス姉妹。スミス兄弟が長いこと御病気なんで，何かと物入りだろうと思っていたんですよ。たいした額じゃありませんが，どうかこれでクリスマスのものなど何か買って下さい。ここしばらく，御自分のものなどお買いになっていないんでしょう。」母は涙にむせびながらお礼を言いました。その小切手をいただいて，ふたつに折りたたみ，家へ帰る道すがら，母の心は喜びと感謝に弾みました。家に着いて明かりをつけてから見ると，いただいたお金は什分の一として納めた金額とちょうど同じでした。

やがてクリスマスの朝がやって来ました。母は「今年は什分の一のクリスマスなのよ」と言って，あの日の出来事を私たちに話してくれたのでした。什分の一の祝福は，このようにして少しずつ私たちの胸の奥に刻まれていきました。

あの什分の一のクリスマス以来，私たちはクリスマスをさまざまな土地で迎えてきました。イギリスで，ユタで，そして合衆国内のいろいろな州で。豊かなクリスマスもあれば乏しいクリスマスもあり，楽しいクリスマスがある一方，そう楽しくないクリスマスもありました。しかし私たちにたとえ悲しいことがあっても，父はそんなことにおかまいなく，私たちの家族以外の人でクリスマスをとても迎えられそうもない人々のことを忘れないようにしていました。クリスマス休暇のお祝いは，子供時代に植えつけられた「受けるよりは与える方が，さいわいである」という考え方に終始貫かれていたのです。クリスマスだけでなく，父の生涯の一日一日がその人生哲学に立っていて，その実践が私たちの心に終生忘れ得ない影響を残しました。私たちはクリスマスをかけがえのないものと思っています。



朗読劇：キリストの使命

「大きな喜び」

ジーン・S・マーシャル

女　「御使ガブリエルが，神からつかわされて，ナザレというガリラヤの町の一処女のもとにきた。この処女はダビデ家の出であるヨセフという人のいいなずけになっていて，名をマリヤといった。……御使がマリヤのところにきて言った，『恵まれた女よ，おめでとう，主があなたと共におられます』。……『恐れるな，マリヤよ，あなたは神から恵みをいただいているのです。見よ。あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。……彼はとこしえにヤコブの家を支配し，その支配は限りなく続くでしょう』」。(ルカ1：26—28，30—31，33)

男　「兵率たちは，いばらで冠をあんで，イエスの頭にかぶらせ，紫の上着を着せ，それから，『ユダヤ人の王，ばんざい』と言った。そして平手でイエスを打ちつづけた。……ピラトは彼らに言った，『あなたがたの王を，わたしが十字架につけるのか』」。(ヨハネ19：2—3，15)

女　「ヨセフもガリラヤの町ナザレを出て，ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。」(ルカ2：4)

男　「イエスはみずから十字架を背負って，されこうべ（ヘブル語ではゴルゴタ）という場所に出て行かれた。」(ヨハネ19：17—18)

女　「ヨセフもガリラヤの町を出て……それは，すでに身重になっていたいいなずけの妻マリヤと共に，登録をするためであった。ところが，彼らがベツレヘムに滞在している間に，マリヤは月が満ちて……」(ルカ2：4—6)

男　「ゴルゴタという場所に出て行かれた。……彼らはそこで，イエスを十字架につけた。」

女　「イエスがヘロデ王の代に，ユダヤのベツレヘムでお生れになったとき，見よ，東からきた博士たちがエルサレムに着いて言った，『ユダヤ人の王としてお生れになったかたは，どこにおられますか。わたしたちは東の方でその星を見たので，そのかたを拝みにきました』。」(マタイ2:1—2)

男　「太陽は光を失い，……そして聖所の墓がまん中から裂けた。」(ルカ23：45)

女　「初子を産み，布にくるんで，……」(ルカ2：7)

男　「さて，その上着には縫い目がなく，上の方から全部一つに織ったものであった。」そこで彼らは互いに言った，『それを裂かないで，だれのものになるか，くじを引こう』。」(ヨハネ19：23—24)

女　「初子を……飼葉おけの中に寝かせた。客間には彼らのいる余地がなかったからである。」(ルカ2：7)

男　「アリマタヤのヨセフがピラトのところへ行って，イエスのからだの引取り方を願い出て，それを取りおろして亜麻布に包み，岩を掘って造った墓に納めた。」(ルカ23：52—53)

女　「さて，この地方で羊飼いたちが夜，野宿しながら羊の群れの番をしていた。すると主の御使いが現れ，主の栄光が彼らをめぐり照らした……御使は言った。『恐れるな。見よ，すべての民に与えられる大きな喜びを，あなたがたに伝える。きょうダビデの町に，あなたがたのために救主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである』。」(ルカ2:8—11)

男　「石が墓からころがしてある……見よ，輝いた衣を着たふたりの者が，彼らに現われた。女たちは驚き恐れて，……言った，『あなたがたは，なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは，ここにはおられない。よみがえられたのだ』。」(ルカ24：2，4—6)

女　「するとたちまち，おびただしい天の軍勢が現れ，御使と一緒になって神をさんびして言った，『いと高きところでは，神に栄光があるように，地上では，み心にかなう人々に平和があるように』。」(ルカ2：13—14)

男　「『わたしは，新しいいましめをあなたがたに与える，互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように，あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば，それによって，あなたがたがわたしの弟子であることを，すべての者が認めるであろう』。」(ヨハネ13：34—35)

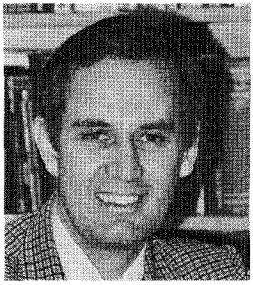
女　「『見よ，大きな喜びを，あなたがたに伝える。きょう，……あなたがたのために救い主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである』。」(ルカ2：10—11)

男　「『見よ，大きな喜びを，あなたがたに伝える。きょう，……あなたがたのために救い主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである』。」(ルカ2：10—11)

ふたりで行なうこの朗読劇は，聖餐会，クラス，家庭の夕べ，その他適切な場で用いることができます。男性一人，女性一人によって朗読するように設定されていますが，他にも応用できると思います。

質　疑　応　答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり，教会の教義を公式に宣言するものではありません。



ユタ大学インスティテュート講師
イースト・ミルクリーク第16ワード部監督
J・ルイス・テイラー

「幼児の祝福では，命名と祝福の両方を私たちの天父に向かって宣べるのでしょうか。」

『メルケゼデク神権手引き』(p. 24)には，幼児の祝福に関して次のように指示されています。

1．幼児の儀式を執行する人の両腕でだくか，子供が大きければその頭に手を按く。
2．祈りにおけると同じように天父に呼びかける。
3．権能（メルケゼデク神権）によって儀式が執行されることを宣言する。
4．子供に命名する。
5．聖霊の導きのままに，祝福の言葉を述べる。
6．イエス・キリストのみ名により終える。

儀式や祝福，あるいは任命ではほとんどの場合，神権者は祈る時のように主に語り

かけるのではなく，むしろ受ける人に向かって語るように指示されています。神権者は主の代理人として，単に祝福を願い求めるのではなく，主から霊感を受けて実際に祝福を授与または宣言します。

しかし，幼児の祝福の儀式，特に子供に命名する儀式では，上記の手引きにあるように，私たちは天父に向かって宣べるように勧められています。その理由はいろいろあると思いますが，おそらく幼児には祝福の言葉が理解できないことからくるのでしょう。主に向かって宣べるといっても，神権者は幼児の名前を与えて下さるよう主にただ願い求めるのではなく，幼児に名前を与える権能を持っています。(「私たちはこの幼児を……と命名いたします。」)

同様に，儀式の中で祝福を授ける場合も，神権者は主から託された権能によって祝福を主に願い求めるばかりでなく，みたまの導きのままに祝福を宣言する，すなわち与えることができます。これに関する指示は，「メルケゼデク神権手引き」のほかにも，教義と聖約20：70に記されています。

「すべて皆，子女を有するキリストの教会員は，その子女を集会に於て長老たちの許に連れ来り，長老たちはイエス・キリストの御名によりて按手を施し，且つ御名によりてこれに祝福を授くべきものとす。」

このように，この儀式の祝福を授ける部分では，天父に語りかける必要はないと思われます。実際に私自身だけでなく，他の神権者も経験していることですが，特別な祝福や約束を与えようとしても主のみたまを感じないことがあります。そのような場合は，主の祝福を願い求めることが適切であると思います。

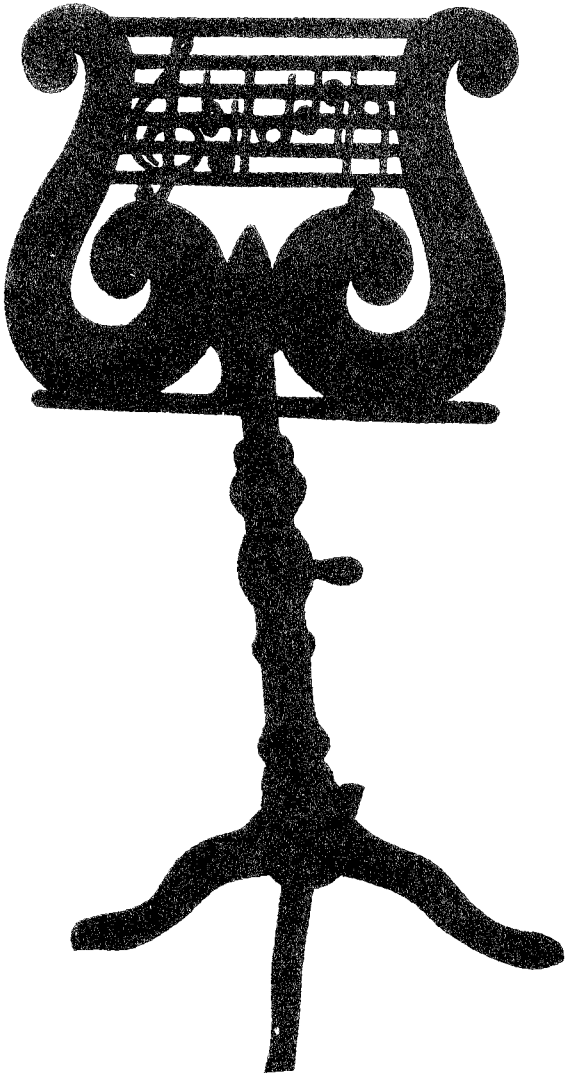
実際には，儀式は嘆願と祝福の両方の形をとることができるようです。すなわち神権を持つ兄弟は，みたまによってそうするよう導かれるならば子供に祝福を授けることができますし，また同じようにみたまによって導かれるならば祝福を願い求めることもできます。祈りの言葉も天から啓示されたものであることが理想的でしょう。(Ⅲニーファイ19：24参照)

神権者は主の代理人となり，主に代わって行動し，主がその場にいれば語られるであろう言葉を語り，行なわれるであろう業を行なうように努めるという実に大きな責任を負っています。とりわけ，子供に祝福を授ける立場にある父親は，祝福を授ける時にみたまの導きを受けられるように，断食と祈りにより，また沈思黙考により，みずからを備える必要があります。これは父親にとって大きな喜びであると共に，責任でもあります。

最も重要なことは，主が私たちに（救いの儀式ではありませんが）幼児の命名と祝福の儀式を執行する特権を与えて下さったことです。幼児を主のみ前と，家族や教会員の前に差し出して捧げることができるのは何とすばらしい祝福でしょう。天から授けられた権能と知恵により幼児を命名し，祝福を願い，祈り，私たちの最善の望みと調和できるようにみずからの手で直接祝福を授けられることは，何と恵まれたことでしょう。

花ひらいたワード部音楽プログラム

ルス・リース



問題はおそらく多くのワード部に共通していることでしょう。私たちのワード部では音楽のできる人が不足していました。何年もこの問題に取り組みながら，成果はほとんど上がらない状態でした。そこで，監督会と音楽指揮者の私で長期訓練計画を立て，それが大成功を収めたのです。

その計画というのは，成人全体の音楽水準を引き上げ，若人に音楽教育を施すことでした。監督会はワード部の成人会員にピアノ，オルガン，指揮，声楽などの勉強をするように呼びかけ，将来はワード部の礼拝行事の中に楽器の演奏や歌の発表をする時間を設けるのでその用意をするようにと奨励しました。

成人に対するこの呼びかけは音楽プログラムの向上に大いに役立ちましたが，若い人たちが準備しなければ将来も音楽のできる人材が不足することははっきりしていました。手始めのこの仕事は非常にうまくゆき，音楽を礼拝行事に欠かせない楽しいものにするのに大きく貢献しました。

まず第一の目標は，若い人たちの間で音楽を学ぼうとする意欲をかきたてるための環境づくりをすること，そして音楽演奏が意義ある礼拝でもあることを知ってもらうことだと，私たちは感じました。この目標は予想したより簡単に達成されました。ワード部の中心的な若者たちが参加すると，たちまち音楽がみんなの人気を集めるようになったのです。

ワード部の青少年音楽プログラムは，鍵盤楽器，指揮，合唱，その他の楽器の4つに分けました。

鍵盤楽器のクラスでは，年に2，3回，初等協会でピアノ，聖餐会でオルガンと，前奏や後奏を弾く機会を初心者のために用意しました。8歳から12歳の子供たちも参加し，音楽教師が子供にも弾ける簡単なピアノ曲を選んであげました。独奏や伴奏と違い，前奏や後奏はあまり緊張しなくてすむため，若い人たちは教会で演奏する機会を心底楽しんだようです。こうしてこのプログラムは，青少年の人たちに格好の目標を提供することとなったのです。

初心者向けプログラムの最も大切な点は，緊張の少ない状態でできるだけたくさん演奏させるということです。演奏する時には必ず音楽ができる大人を脇に付け，時計を見たり，ページをめくったり，時には少し連弾したりさせました。

中級の生徒も前奏や後奏を弾き，時々初等協会で歌の伴奏をしました。

上級の生徒は交代で，ミューチャルや神権会で讃美歌を弾きます。聖餐会の独奏を頼むこともあります。

指揮クラスの主軸は何といっても，ワード部で定期的に行なう教会合唱団指揮者講習会です。この講習会はグループ単位で，できるだけ楽しく，ユーモラスにやってゆこうと努めています。修了生はミューチャルや神権会で指揮をする機会を与えられます。目標は，音楽に関心のある若人全員が高校卒業までに簡単な讃美歌だけでも指揮できるようになることです。

合唱のクラスは，歌いたい青少年数名で発足しました。ちょっとした合唱曲から初めて，だんだん高度な曲に進みました。すぐにわかったことですが，他にも声をかけられれば参加したいと思っている人たちが

いるのです。それでその人たちを勧誘しました。

私たちの努力は大いに報われました。青少年合唱団は毎週という具合にはゆきませんが，特別行事の時などに歌を披露して，見事な合唱ぶりでワード部の人たちを楽しませてくれました。彼ら自身も歌を楽しんでいました。

バスを歌うことになっていたある少年が，友だちや親に言われてしぶしぶ練習に通い始めた時のことです。自分の席に着いてから，「僕，何でこんなことしてるんだろう」「僕が来るなんて，先生よっぽど運が強いんですよ」と言っていました。練習の後半に私が個人的に少し教え（個人教授はよくやります。青少年は音楽の天才ではありません。ただ一生懸命頑張っているのです）一部を彼が歌えるようにやさしく変えましょうと言うと，彼はそれを断わりました。「書かれてある通りに歌いましょう。その方がずっと楽しいや」と言うのです。

ついでですが，音楽は流行のポップスタイルを使う必要はないことがわかりました。讃美歌や聖歌からキャロル，合唱曲まで幅広く，それで十分でした。青少年の合唱に時々青少年の伴奏が付きました。

楽器のクラスも素晴らしい成果を収めました。若い人たちがバイオリン，ビオラ，チェロ，トランペット，フレンチホルン，トロンボーンを練習しています。どの楽器もソロからアンサンブルまで教会の集会で発表しています。合唱曲の伴奏や集会の前奏，後奏を頼まれる人もいます。

楽器クラスについては，ワード部音楽奨学制度を作りました。教会員からの献金でまかなっているのですが，余裕のない生徒が音楽のレッスンを受けたり楽器を買ったりするのに使っています。

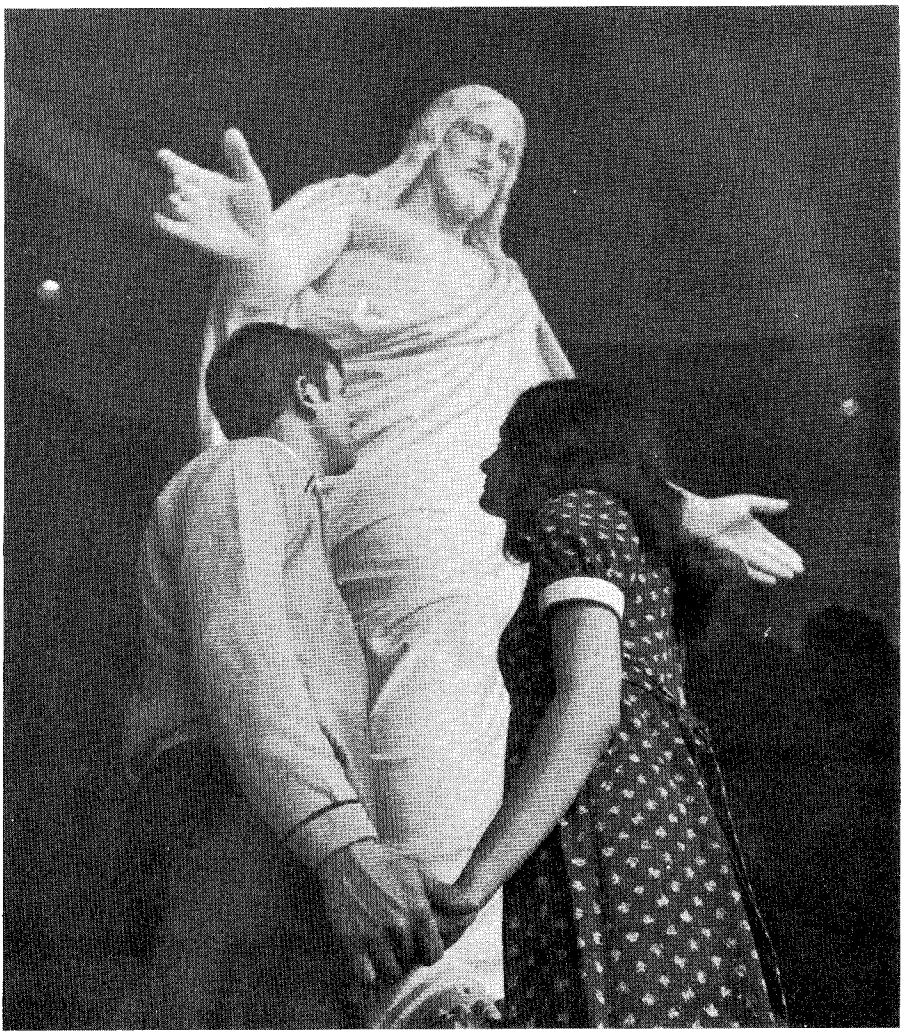
私たちの努力はどれもみな十分に報われています。これを書いている現在，9歳から17歳までの34人の青少年が音楽を勉強しています。他に11名が1年以上の勉強を済ませてこのプログラムを修了，ワード部内で活躍中です。

私たちの成功には，主な要因がふたつあります。第1は，ワード部音楽委員長を音楽のできる人というよりむしろ教育者，組織者という観点から見たこと（音楽のできない人でも責任は同じように果たせます），第2は，一緒に練習し，演奏することから生まれる楽しさ，温かさ，一致といったものに力点を置いたことです。学び奉仕し親しく交わる，それが全部一緒にできるのです。まさに無敵のコンビネーションです。

私たちのワード部は大きくはありません。12歳から18歳までの活発な青少年はわずか36人です。しかしこのプログラムに参加した人たちの興奮が広がって，36人の内音楽を勉強したことがないのはほんの6人ほどになりました。若人の間で，ワード部音楽プログラムに参加することは格好の場となっています。ある姉妹は青少年の演奏を聞いた後でこのように言いました。「そこにすわっているまだ小さな子たちが，『いつか自分もあそこに上がるんだ』って思っているのがよくわかるんですよ。」

純潔——力の源

スティーブ・ギリランド



この背定的な原則は私たちに自己を理解する力と霊的な力とを与え，他の人々との間に永続する関係を築き，私たちを神に近づけてくれる。

「性とか純潔とかいった問題について親や教師から教わることは，どれも皆罪に関係することばかりです。純潔という概念に対してもっと背定的な考え方はできないものなのでしょうか。」こうした疑問は，若人と共に活動する私たちにとって何ら耳新しいものではありません。

この疑問に対して末日聖徒は，「できます」と確信をもって答えます。私たちが信じる福音が，純潔に対して明確で実際的な視野を与えてくれているからです。このことは，福音の教えとこの世の教えとを対比してみるとよく分かります。

たとえば人間の体についての考え方がそうです。人が作った宗教は，肉体というものは悪だから霊をもって克服しなければならない，そして人は肉体という「かせ」から解放されなければならないと教えます。しかし回復された福音はこれとは正反対で，肉体は祝福であると教えます。私たちはこの地上に，肉体を得るために来ました。肉体を用いてさらに進歩するためにです。この肉体がなければ，「完き喜び」（教義と聖約93：33—35参照）を得ることはできません。また自由も失われ，束縛された状態に置かれることでしょう（高価なる真珠「死者の贖いに関する示現」参照）。福音は，私たちが肉体を伴って日の光栄の最高の位に入ると教えています。

パウロの次の言葉は，同じことを指して言ったものと思われます。「しかし不品行をする者は，自分のからだに対して罪を犯すのである。」（Ⅰコリント6：18）

第二の偽りの教えは，夫婦間で行なわれる深い交わりを必要悪と考えることです。しかしこの行為は，神の戒めとみたまに則して行なわれるならば，人生を豊かにし，心にも体にも活力を与えてくれるものとなるのです。キンボール大管長は，夫婦の交わりを「本来善なるもの」と言っています（「聖徒の道」1976年4月号，p. 187）。またビリー・グラハムの言葉を引用して「性は素晴らしい従者になり得るばかりか，恐ろしい主人にもなり得ること，愛と友情と幸福を培うこの上ない原動力となり得るばかりか，世にある力のうち最も破壊的な力になり得ることを，はっきりと教えている」（「聖徒の道」1974年8月号，p. 372）と述べています。

第三の偽りの教えは，人間を，肉欲に従う性質を持っているがゆえに本来悪なるものであるとすることです。しかしながら，聖典の教えはそうでありません。「肉体，肉欲，悪魔に従う者」となるのは，人がサタンに従った時であるとあります（モーセ5：13；教義と聖約20：20参照）。

ベンジャミン王はそのことについて，次のようにはっきり述べています。「人がもし聖霊の導きに従……わないならば，とこしえに神の敵となるであろう。」（モーサヤ3：19）

真理は，純潔というものが神のみこころにかなった徳であると教えています。「生れながらの人は，神の御霊の賜物を受けいれない。それは彼には愚かなものだからである。また，御霊によって判断されるべきであるから，彼はそれを理解することができない。」（Ⅰコリント2：14）つまり，霊的な人だけが霊に関わる事柄を理解することができるということなのです。世の人々に純潔の律法を守る理由が完全には理解できないのはそのためです。しかし，末日聖徒は違います。

強固な意志と理解力を培う

デビッド・O・マッケイ大管長は，「霊性には意識して自己を征服するということが含まれていなければならない」(*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」1969年12月号，p. 31）と述べています。清さという徳が与えてくれるふたつの偉大な祝福は，自己を征服する力と自己を知る力です。純潔の律法として与えられている聖句を「文字」として見ると，性に関する交わりを自分の伴侶，すなわち合法的に結婚した夫または妻だけに限定するという意味のことが書いてあります。しかしこれを「霊」の面から考えれば，その意味するところはそれだけにとどまりません。すなわち，あらゆる性的な欲望や関連する行為を神聖かつ適切な状態に保たなければならないということです。肉体的な欲望そのものは悪ではありません。問題はその欲望のままに生活することです。そうした生活は情欲の生活，つまりみたまを損なうものを追い求める生活です。

情欲は，霊的なものを高揚し達成しようとする気持ちを妨げ，逆にみたまを失わせるような思いや行動に人を誘います。そして次第に麻薬のように私たちをむしばみ，長い時間をかけて達成していかなければならない目標からそらせてしまうのです。情欲はほんの一時の経験のために大切なものをすべて犠牲にするように求めます。そして，後に残るのは苦悩と悲しみと混乱だけです。

もしも人が前世での行ないによって汚れた欲望を抱くようになったとしたらどうでしょうか。原則は同じです。つまり，欲望それ自体は罪ではありません。問題は，人がその欲望をどう処理するかということです。自然に湧き上がってきた欲望をなおさらかき立てるような行動に出てよいでしょうか。あるいは，欲望に伴って生じるふさわしくない思いや考えと共にその欲望を捨ててしまうべきでしょうか。キンボール大管長は，同性愛などの異常な行動に陥った人でも，忍耐と決意と信仰によって欲望をコントロールし，正常な欲望をもって異常な欲望を満たすことができるようになると述べています[1]。私は監督の時，また副監督の時にそうした例を数多く見てきました。

克己心を養おうと進んで努力する人は，自分自身について理解できるようになります。つまり，自分自身の行動や態度をはっきりつかむことによって，今の自分がどういう種類の人間であるかがわかるようになるのです。また，純潔の誓約をどの程度厳密に守っているかによって，人生の他の分野で自分がどれだけ強いか弱いかが決まってくるようです。そしてそれは，自分が日の光栄の理想にどれだけ厳密に従っているかということを示すことになります。一方，孤独や劣等感といった混乱の原因となる感情が存在する場合，正面から立ち向かって解決すればよいのですが，サタンは不道徳な行ないをもってそうした感情から逃避するように誘惑します。しかし，そのような逃避は長続きするものではないので，逃避を試みた人は，永久に満たされることのない道を求めて，何度も何度も同じことを繰り返すのです。こうして人々は，汚れた行ないによりますます混乱した状態へとのめり込んでいきます。

清さを保つには克己心が必要です。私の場合は，克己心を養うのには自分なりの方法があるはずだという観点に立つことから始めました。映画や書物などで見ない方がいいと思うものがありましたし，これは避けるべきだと思われるような状況もいくつかありました。中には，そんなことあまり気にしない方がいいのではないかと人に言われたものもありましたが，私にとっては

問題でした。他の人が同じことをしていて別に問題が起こらないのだから，自分もしていいはずだと合理化してしまうことがあったからです。そしてそうした合理化の結果，コントロールを要する思いがますます増え，何かと自分の心を抑えつける毎日でした。思いをコントロールしようとして，かえって火に油を注ぐような結果になっていたのです。こうして私は，自分自身の体の中にある霊というものがどういった作用を起こすものであるかを理解し，さらにその作用に対処していくには，純潔ということについてもっと深く知らなければならないと思うようになりました。みたまの助けを借りて，どこで線を引くかを決めなければならなかったのです。

自己に対する知識の中で最も価値あるものは，ただ単に私たちの心に貯えられるだけのものではありません。メディアやそれぞれの人生がもたらす刺激を乗り越えて，私たちの魂に深く浸透していくものです。こうした最も価値ある知識を得るには，逆境にあってもそれに負けない信仰と決意が必要ですし，誘惑という触手から免れるだけの強さがなければなりません。自分をコントロールできるということは何と素晴らしいことでしょう。

従って大切なことは，純潔もしくは清さというものは，まず第一に性的な欲望や行動を自制するということであり，第二に，性に関するあらゆる事柄について，自己を理解し，自己をコントロールすることだと言えます。

永続する関係を築く

純潔はまた，個人個人の関係を永続させるのに大きな力となります。求愛期間は大切な期間ですが，賢明な男女はお互いの気持ちを交換し合うことにより相互の理解と意思の疎通をはかるように努め，ふさわしくない行為にふけることによって現実に押し流されてしまうようなことはありません。純潔は永遠の伴侶という可能性に向けて男女を育てていく力なのです[2]。また純潔は，私たちが持つひとつの強い力，性に対して適切な視野を与えてくれます。この世は性を他に大切なものが何もないかのように扱いますが，純潔という徳は，性が結婚を形造るいくつかの大切な要素の中のひとつであることを理解する上で大いに役立ちます。

またこの世は，欲望に関してまず第一に考えるべきことは個人の満足であると教えます。そうすると，人と人との関係が利己の上に成り立つことになります。そして，与えることよりも得ることの方に重きが置かれるのです。

しかし純潔の徳は，満足感よりも霊的な必要性の方を重視します。得るよりも与える方を強調するのです。そして相手に対して自己を抑えること，それも愛によりそうすることが必要になってきます。アルマは息子にこう勧告しました。「一切の欲を抑えて愛に満ちよ。」（アルマ38：12）

キンボール大管長は，性にふたつの目的があることを説明しています。すなわちひとつはこの世に子供をもたらすことであり，もうひとつは「夫婦の間に真の一致をもたらす愛の表現」であるということです（「聖徒の道」1974年8月号）。また次のようにも語っています。「夫婦間の正しい性関係はすべて子供の出産のためにのみ限定する必要がある，という主からのみ言葉があるわけではないが，アダムの時から今日に至るまで，主が放縦な性関係を認められたことがないという証拠は，数多く挙げることができる。」（『人類への主の計画』「聖徒の道」1976年4月号，p. 187）

以上のふたつの目的は，この性という力

を神聖かつ主が定めたもうた限界内に保つ上での指針を与えてくれます。もしも夫婦の間で相手の要求や感情を意に介しないような態度が見られれば，この神聖な目的は破れてしまうことでしょう。またこの力をひとりで使えば，神聖な目的はくじかれてしまいます。そして自分自身の要求にのみ心を向け，情欲のとりこになり，遂にはそうした自分を克服できなくなってしまうのです[3]。与えるよりも取る方に関心が向くことは言うまでもありません。結婚まで純潔を守った夫婦が，結婚後の夫婦関係を円満に保てるという事実をはっきり認識しておく必要があります。

純潔の徳を守る男女は，互いを強めることに心を向けます。互いに対する責任感が，相手を弱めたり誘惑したりする行為から遠ざけるのです。言葉遣いや服装が慎み深いものであれば，自分だけでなく相手をも悪から守ることになります。

相手へのこの思いやりの態度は，肉体的な関係をはるかに越えたものです。あらゆる面で清く誠実な人は，だれよりも堅固で豊かな関係を築くことができるでしょう。純潔は伴侶への愛を表現するだけではありません。神殿の誓約のもとに生を受け，永遠の家族にあって完全な模範を見る子供たちにとっても，愛の表現となるのです。

神との間にさらに豊かな関係を築く

マッケイ大管長は，「神への道は人の心を通る」と語りました。私たちの神との交わりは，他の人々と私たちとの関係に大きな影響を及ぼします。逆に言えば，他の人々との関係を成熟した永遠の関係にしていくには，神の導きが必要なのです。

愛は，私たちが育むことのできる特質の中で最も神聖なものです。しかし，私たちの心を利己心が支配するようになれば，聖霊は宿りにくくなります。聖霊を拒むと，私たちの神との結びつきはゆがめられ，不安やあせり，また身勝手な考えが生じてきます。こうして，人生において最も頼りになる力のひとつである主のみたまがなくなったために，私たちは疑いや恐れという思いに足元をすくわれるようになります。そして伴侶を無能な人間であると考え，伴侶は言うに及ばず，周囲のすべての人々に対して全く思いやりがなくなってしまうのです。このような状態ほど信頼関係を速くなくしてしまうものはほかにありません。

これに対して純潔の徳を持てば，聖霊の力が私たちに及ぶようになり，人間関係を永続させる基である信頼が培われていきます。また，他の人々への愛を通して，私たちは天父と御子への愛がどのようなものであるべきかを悟るのです。これこそ最も大切なつながりなのです。（教義と聖約132:24参照）

主に対して自らを十分に捧げるには，まず初めに自分自身をコントロールする必要があります。主の弟子になるには自分の体を自分の心の弟子にしなければならないのです。すべてのものを主に捧げることを旨とする奉献の律法を受け入れるには，まず純潔の律法に従わなければなりません。また純潔の律法に従うには，従順と犠牲の律法に従って生活しなければならないのです。このことを行なえば，その人の自信は「神の前に強く」（教義と聖約121：45）なるでしょう。そして「神の楽しい言葉を受け，……そしてあくまで神の愛を味わう」（モルモン経ヤコブ3：2）のです。こうしてもたらされる喜びや平安，力はたとえようもないほど素晴らしいものです。このことについてマッケイ大管長はこう語っています。「能力が高められ，自分自身の中に真理が広がっていくことを感じることは，人生で最も崇高な体験のひとつと言えよう。」

（*Improvement Era*「インプルーブメント・エラ」1969年12月号，p. 31）

私たちは，神と同じような生活をしなければ神を完全に知ることはできません。若い頃，私は教会のある指導者たちに批判的で，彼らが下した決定に心から従えませんでした。しかしその後監督の職に召され，物事を前とは全く異なった見地から眺めるようになってきました。そして，以前ほど批判という誘惑に駆られなくなりました。それは監督という召しにある人が抱える問題や思いを自ら体験できたからです。同じようにして，私たちは神に似た者となり，神をもっともっと理解できるようになるのです。そして私たちの神との関係はもっと豊かなものとなります。モーサヤは，私たちが主に仕えれば「思いもかけない主人」（モーサヤ5：13）に近づくと述べています。主と同じような生き方をするならば，私たちは主と同じような心と思いやりを持つことができるようになるでしょう。純潔の徳は，他の福音の諸原則と同じように，主を知る手だてを与えてくれます。それは純潔という徳が，理解や自制，愛，思いやりといった，神に似た者となる上で不可決の資質を育んでくれるからです。

私は誘惑に打ち勝つことに疲れを覚えると，イエスが「罪は犯されなかったが，すべてのことについて，わたしたちと同じように試練に会われたのである」（ヘブル4：15）ということを思い起こします。主は自己を制することを学ぶために肉体を授かりました。主は私たちと同様，霊的に疲れるという可能性を具えておられました（教義と聖約19：18参照）。確かにサタンはイエスに罪を犯させようとしてあらゆることを試みました。ですから私は，私自身が遭遇する誘惑がどんなに強いものであっても，かつて主はそれを克服されたのだと考えるのです。主はすべての面で私たち一人一人を御存じの御方ですから，誘惑に立ち向かう私たちを強め，助けて下さることでしょう。

私たちは，犯した罪を告白しそれを捨てる時に主がすべてを忘れて下さるという教えに，いつまでも感謝の念を抱くことでしょう（教義と聖約58：42—43参照）。救い主の贖罪があるので，私たちは永遠の世界にあって罪に苦しむことはありません。皆さんも私も，全く罪のない清い状態に到達することができるのです。何と素晴らしいことではありませんか。

こうして私たちがこの地上で生活する間に性というものがどういう働きをするかを眺める時，主がなぜ私たちに愛をもって純潔の律法をお与え下さったかがわかってくるのです。

「清い生活を送る人は何と栄光にあふれていることか。その人の歩みには恐れはなく……人からは敬われ……主からは愛される。なぜなら汚れがないからである。永遠の昇栄が彼を待っている。[4]」

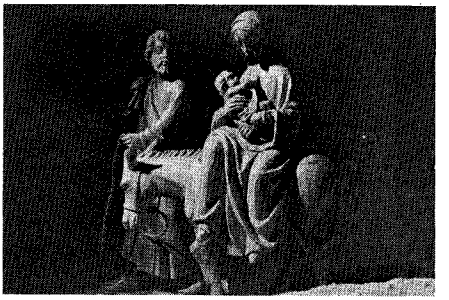
スティーブ・ギリランド：
カリフォルニア州立大学ロングビーチ校インスティテュート指導主事，7児の父，カリフォルニア州ロングビーチにあるレイクウッド第1ワード部監督の任にある。

注

1．スペンサー・W・キンボール「友へ」（PBCT 0758 JA）
2．『純潔を心理学の立場から見て』「聖徒の道」1976年11月号
3．ボイド・K・パッカー「中学生，高校生の年代にある兄弟たちへ」(PBAP 0210 JA)
4．J・R・クラーク「大管長会メッセージ」1942年10月3日，pp. 174—77

小さなお友だちへ

大管長からのクリスマス・メッセージ



イエスさまも子どもでした

この楽しいクリスマスの季節にわたしたちは，ナザレのイエスの誕生をお祝いします。イエスさまの誕生のお話は，多くの人々に知られています。そのぎせいの物語を読んで心をうたれない人はいないでしょう。

聖典を読むと，おさないイエスさまが天使に見守られていたことや，この世の両親が神の力に導かれていたことがわかります。イエスさまを守るために，ひとりの天使があらわれて，両親にヘロデ王のおそろしい計画をつげました。

「立って，幼な子とその母を連れて，エジプトに逃げなさい。そして，あなたに知らせるまで，そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を捜し出して，殺そうとしている。」（マタイ２：13）

さて，ヘロデが死んで，きけんがなくなると，また天使が父ヨセフに夢であらわれて言いました。

「立って，幼な子とその母を連れて，イスラエルの地に行け。」（マタイ２：20）

家族がパレスチナへもどっても，まだ不安が残っていました。すると，また天使が下ってガリラヤへ行くようにと告げました。「幼な子は，ますます成長して強くなり，知恵に満ち，そして神の恵みがその上にあった。」（ルカ２：40）

イエスさまは，ナザレという丘の上にある町で育ちました。このナザレで，イエスさまは大切な将来に備えるたくさんの経験をなさったにちがいありません。

イエスさまは，ガリラヤの海にほど近い所に住んでいたようです。そこで，雲やあらし，波，すな，岩，船について学んだことでしょう。そこは地中海からもそう遠くなかったので，イエスさまは，大きな船や潮

の満干，川，そして後にたとえ話に用いたすべてのものに通じるようになったのかもしれません。

少年のころ，イエスさまは，タボル山を登ったことでしょう。後に3人の使徒をつれて登った所は，よく知っておられたのかもしれません。タボル山を登るのはさぞ大変なことだったと思います。でも，育ち盛りのイエスさまには，とてもひきつけられるものがあったのかもしれませんね。

イエスさまはまた，ナザレからヨルダン川へも足をはこばれたことでしょう。ヨルダン川のあたりには，たくさんの動物が住んでいて，イエスさまは鳥の巣や，きつねや，きつねのかくれ家を見つけたことでしょう。そして，緑の草原も食料を入れた納屋も，苦労して働く人びとのことも知っていたでしょう。イエスさまは大工の家に育ちました。ですから，道具や材料，測量のことも心得ておられたにちがいありません。

また，ひとりで何度もつりに行ったり，マリヤがパンを焼くのを手伝ったりもしたことでしょう。いばらで足をひっかいたこともあるでしょう。いちじくやあざみも知っていたでしょう。このような経験は，イエスさまの生活の一部にすぎません。でも，イエスさまがお話になる時，人びとはイエスさまにこれらの知識のあることがわかりました。

イエスさまは，羊が人びとにとって大切なものであることをよくごぞんじでした。羊飼いのいない羊が道にまよってしまうことを知っておられたのでしょう。イエスさまは，ご自分にしたがう人々に，次のように言っておられます。「すなわち汝らはわが羊にして，御父がわれに与えたまいし者の中に数えらるるなり。」（第3二ーファイ15：24）

「わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは，羊のために命を捨てる。」（ヨハネ10：11）

クリスマスになると，贈り物をしたり，クリスマスの歌をうたったりします。そのとき，わたしたちは，命という最大の贈り物をしてくださった羊飼い，イエスさまの誕生を祝っているのだということをわすれないようにしましょう。

皆さんは主の小羊です。このクリスマスに，そしていつも，皆さんの上に祝福がありますように。

クリスマス生まれの弟

シェリー・ジョンソン

雪が積もり，どこもが美しくかざられています。ラジオからはクリスマスの音楽が流れ，人びとはにこにこしながら，「メリークリスマス」と声をかわしています。今年のクリスマスは，ブレアナにとって待ち遠しいことがあるのです。「待ちきれないの。」ブレアナはお母さんに，言いました。

「毎年あなたはそう言うわね。」

「でも今年はちがうわ。9年間もお姉さんになるのを待ってたんだもの。」

「赤ちゃんはクリスマスの後よ。」お母さんはかまうようにそう言いましたが，「ちがうわ」と，ブレアナは信じきったように言いました。「今年のクリスマスにはお姉さんになるんだから。」

お母さんはそんなブレアナを見て，とてもうれしそうでした。

「わたし，ミルクも飲ませてあげるし，おむつもかえてあげる。」ブレアナはやくそくしました。

「あなたならできるわね。」お母さんはそう言って，夕食の仕たくに台所へ行きました。

ブレアナはじっとお母さんのしぐさを見ていました。以前はほっそりしていたお母さんも，今はお腹が大きくなって，体を動かすのも大変そうです。時々，手を休めては背中をさすっています。

ブレアナはふと，戸だなの上にかざってあるイエスさまの人形に目が止まりました。この紙人形は，お母さんとふたりで切りぬいたものでした。マリヤが赤ちゃんのイエスさまをだいてすわっていて，そのかたわらで，ヨセフがマリヤをかばうようにしています。羊かいたちは，そばに寄るのをおそれているようです。

ブレアナは，赤ちゃんのイエスさまをもっとよく見ようと近づきました。

「サラダも作ろうと思うのよ，どう？」ブレアナの思いをさえぎるように，お母さんが言いました。

「さんせい。わたしもお手伝いするわ。」

「それじゃ。お願いね。」

ブレアナは，お母さんのそばに行って，レタスをちぎりはじめました。

「もうあと4日ね。あなたは本当にクリスマスの前に赤ちゃんが生まれると思っているの？」お母さんはそう聞きました。

ブレアナはまた，紙人形の方に目をやりました。マリヤはやさしいまなざしで赤ちゃんを見ています。

「もちろんよ，絶対に生まれるわ。」

「そうなるといいわね。」お母さんはため息をつきながら，背中をさすりました。

「だいじょうぶ，お母さん。」

「だいじょうぶよ，ちょっとつかれただけだから。」

「でも，お母さんはすわってて。サラダはわたしが作るから。」ブレアナが言いました。

ブレアナには，お母さんの具合の悪いことがわかりました。ブレアナはまた，マリヤの方を見て言いました。

「ロバに乗って行ったのね。」

「だれのこと？」お母さんが聞きました。

「マリヤのこと，イエスさまを生む前の。ロバに乗って，ベツレヘムまでの道をどうやって旅したのかしら。お腹が大きくて，気分も良くなかったんでしょう。」

お母さんは目になみだをうかべ，「きっと大変だったでしょうね」と言いながら，紙人形を見つめました。

しばらくの間，ふたりはだまっていました。お母さんは，ほほを伝うなみだをぬぐっていました。

「マリヤとヨセフと赤ちゃんのイエスさまのことをとっても近くに感じるの。今までよりももっと近くによ。一番すてきなクリスマスになると思うわ。」

朝がた，お父さんが部屋に入って来て，ブレアナの肩をそっとたたきました。

「ブレアナ，起きなさい。とうとうお姉さんになったのだよ。」

「なあに。」ブレアナはとび起きました。

「お前に弟ができたんだよ。」ブレアナはうれしくて，お父さんの首にだきついてしまいました。「とうとうお姉さんになれたのね，わたし。」

「お母さんはどう。いつ病院から帰るの。名前は何てつけるの。」

「まあ，まちなさい。一度には答えられないよ。お母さんは元気だよ。お医者さんは，クリスマスイブにはうちに帰れるって言ってたよ。」

「わあーい。」ブレアナはうれしそうな声をあげました。

「お母さんがお前に，何という名前にしようかって言ってたよ。」お父さんがそういうと，ブレアナはそくざに答えました。

「もうきめてるの。ヨセフという名前よ。」

それを聞いて，お父さんは，じっとうなずいていました。

「それはいいね。じゃあ，おじょうさん，ゆっくりおやすみ。」

でも，ブレアナはねつけませんでした。それで，とうとう台所へ行って小さな明りをつけました。戸だなの上の紙人形が照らし出されて，夢の世界にいるように思われました。

「お姉さんになるのをずっと待っていたんですもの。」ブレアナはそっとささやきました。「赤ちゃんを待っていたんだわ。」

ブレアナは人形のそばまで行くと，指でたどりました。そして，マリヤの顔を見てやさしく言いました。「あなたが世界で一番最初にイエスさまをあいした人なのね。わたしも新しい赤ちゃんを世界で最初にあいする人になるの。」

イエスさまをくるんだ青い布を指でなぞっていると，ひとつの思いが浮かんできました。「いつもお姉さんになること考えていたから，自分もそのひとりだってことに気がつかなかったわ。」

ブレアナはまた，マリヤのうでの中の赤ちゃんを見ると，明りを消してベッドへもどりました。

クリスマスイブになり，お父さんとブレアナは，お母さんと弟をむかえに病院へ行きました。

お母さんはブレアナに，「ヨセフをだっこしたい」と，聞きました。

「ヨセフ。」ブレアナは大きな声で，呼びました。

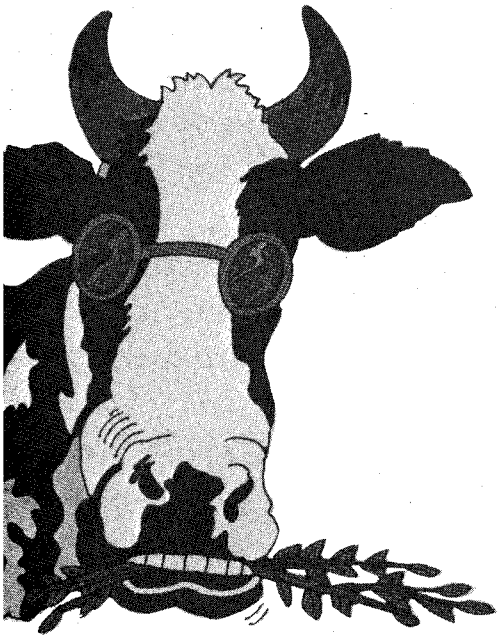
「クリスマスに生まれた弟にぴったりだろう。」お父さんがにこにこしながら言いました。

おかしな動物たち

マリー・ブリングル

もし，くつをはいたガチョウやサングラスをかけたウシ，それにズボンをはいたおしゃれなロバと会ったらどうでしょう。びっくりするかな。世界中をまわってみると，そんな動物たちに出会うんですよ。へんてこなかっこうに見えても，それにはちゃんとわけがあるんです。

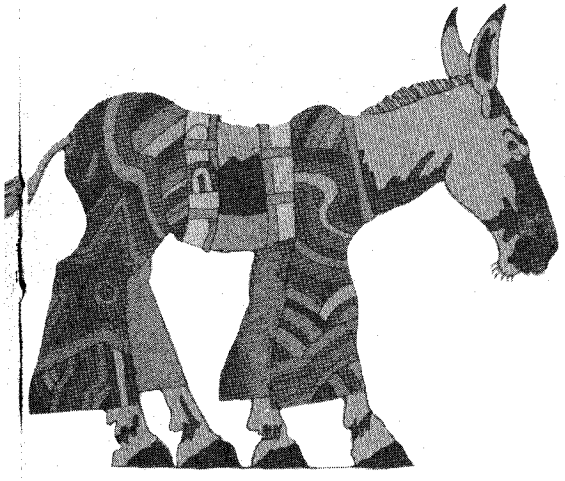
たとえば，ポーランドではとてもガソリンが高くてお百姓さんは車が買えません。ですから，ガチョウを市場に運ぶ時は歩かせるしかありません。農場から市場までは遠いし，おまけにでこぼこ道ときています。それで，お百姓さんは，ガチョウにくつをはかせてから出かけるのです。ガチョウのくつはとてもかんたんです。お金もほとんどかかりません。あたたかいタールの上を歩いて，それからすなの上を歩けば，それでできあがり。このくつをはけば，市場までの遠い道を歩いても平気です。タールとすなで作ったくつが，水かきをしっかりまもってくれるのです。

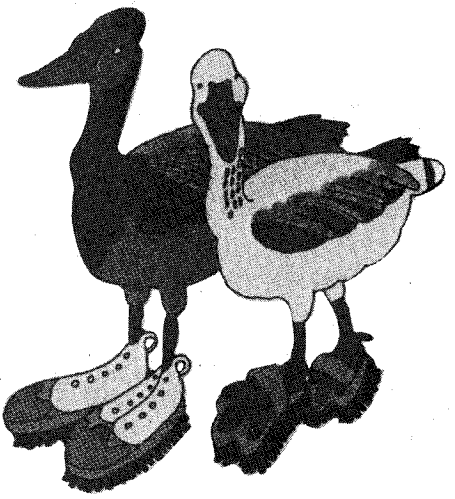


さて次は，サングラスをかけたウシの登場です。ロシアの草原地帯に住むウシたちは，サングラスをかけています。ここは，1年の半分が雪でおおわれているので，ウシたちは食料の草を見つけるのがたいへんです。そうでなくてもキラキラと太陽の光が雪に反しゃして，見ることができません。そうなると，ウシは鼻にたよるほかありません。こんなわけで，かわいそうなウシたちを助けてあげることになったのです。

方法は，もちろんサングラスをかけるのです。でも，どうやって落ちないようにしたんでしょうね。これをかい決するには，ちょっと時間がかかりましたが，サングラスのおかげで草原地帯のウシたちは，雪で目がなやまされることもなくなりました。

最後は，ズボンをはいたロバです。フランスの西海岸にあるレー島へ行くと，ズボンをはいたロバがいるんです。やさい畑やブドウ畑で働くロバは，もう何年もズボンをはいています。ロバは足が4本ですから，もちろんズボンは2本ひつようですね。これにもわけがあるんですよ。島のはまべには，虫の大群が出ぼつする





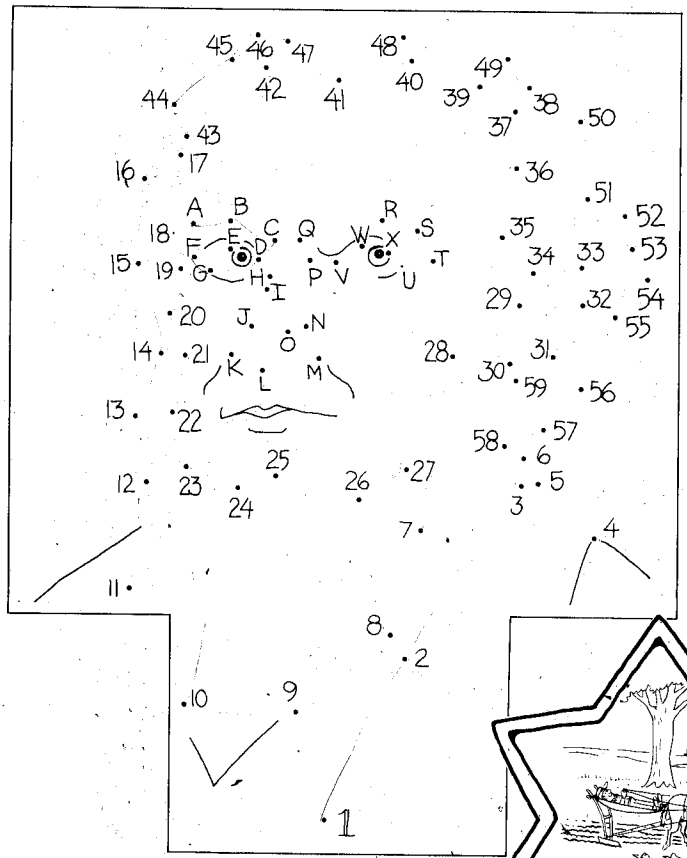
ことがあるのです。それで，ズボンをはいていればさされないですむのです。

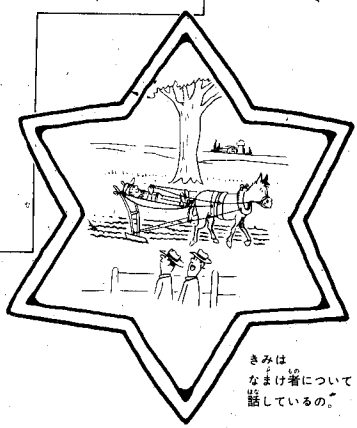
お百姓さんのおくさんが，ロバのズボンをぬい，ズボンつりもつけてあげます。いろいろな布を使ってつくるので，時にはとてもにぎやかなズボンができあがります。たとえば，しまがらとチェックのズボンをいっしょにはいていることもあるのですよ。

さあ，これでくつをはくガチョウやサングラスをかけるウシ，ズボンをはくロバがいるわけがわかったでしょう。動物のことを思うやさしい人たちがいることも。

おもちゃばこ

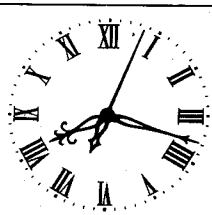
ブリガム・ヤング





きみは なまけ者について 話しているの。

末日聖徒イエス・キリスト教会の第二代目大かん長ブリガム・ヤングは，教会のそう立者であり，イリノイ州カーセージで殺されたジョセフ・スミスの後をつぎました。そして，1844年に人びとの指どう者にえらばれ，また1847年12月27日に教会の大かん長になりました。



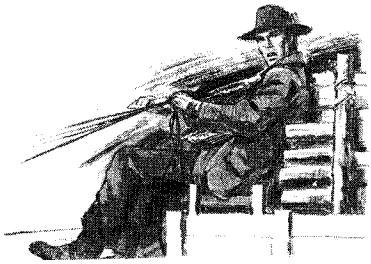
クイズ　島国の首都名をむすんでください。

1．ケソンシティー
2．東京
3．ウェリントン
4．ジャカルタ
5．ナッソー

a．インドネシア
b．フィリピン
c．バハマ諸島
d．日本
f．ニュージーランド

日々の恵み

警告の口笛



フェントン・ホイットニー

私は赤茶けた巨大な岩に向かって恐る恐る馬車を進めました。そこで馬を休めて昼食をとるつもりでしたが，凶暴なクエンホーというインディアンが岩影に潜んでいるかもしれません。時は1925年，経済的に苦しい時代でした。私はわずかな収入を得るために郵便物を自分の馬車に積んでネバダ州のセントトーマスからバンカービルの山々に至るこの道を何度も往復しました。

パイウート・インディアンは友好的で平和を愛していますが，クエンホーはいずれの種族にも属さない凶暴なインディアンでした。この地方の人々は，クエンホーの襲撃に恐れをなしています。私は不安や恐怖と闘いながら，厳しい2月の風に身震いしました。

その日の朝早く，愛する妻のレティーは幼い娘を抱きかかえて，涙ながらに私を見送りました。「フェントン，インディアンを見かけたら，すぐに引き返してね。お金も必要だけど，それよりもあなたの方がずっと大切なのよ。」

私は妻に約束しました。しかし，山々を目の前にした今，仕事を引き受けたことが果たして賢明だったのだろうかと考えていました。家族のために新しい家を建てたいという夢が私を駆りたてたのです。セントトーマスという町には20世帯の末日聖徒が住んでいますが，それぞれ農場や牧場を営んで勤勉に働いています。私はその町とそこに住む立派な住民に深い愛着を感じました。そして，家族と将来私たちの家庭に恵まれる子供たちのために平和で安全な場所を築こうと決心したのです。

ゆっくりと坂道を上るにつれて，馬の息遣いが荒くなりました。正午の休息と餌のからす麦を待ちかねている様子です。私は道に残されたわだちが最近のものかどうか丹念に調べ，遠くに目を凝らして人や馬の姿を捜しました。それから赤茶けた大きな岩の下で火をたいて体を暖めましたがクエンホーへの恐れは少しも消えません。

再び出発の準備をしようと水桶の上に寝袋を置き，身支度を整えました。この時節には，柔らかい毛布で作った寝袋は欠かせません。このほか温かい食事を作る時に使う金属製の鍋や，食糧として小麦粉，ビスケット用のイースト，その上にかける南ユタ産の糖みつ，干した果物，それに少しの豚肉を持っていました。

不安な思いは一時も私から離れませんでした。前方に続く細い道を上り始める前に私はもう一度辺りを見回しました。人影はありません。私は用心深くロープを解いて馬を走らせました。荷馬車の後には猛々と砂ぼこりがたっています。敵の目が寂しい山間へ入って行く私の上に注がれているでしょうか。紺碧の空とそこにぽっかりと浮かぶ白い雲がいかにも平和そうです。しかし，骨にしみる風は厳しい夜の訪れを告げるかのようです。私は主のみ守りがあるように真剣に祈りました。その時，長く鋭い口笛が聞こえました。私は馬車を止めました。このようにひっそりとした場所では，人の注意を引くために鋭い口笛をよく使います。周囲を見渡しましたが，だれもいません。私は馬をつなぐと，荷馬車の上に登り，峡谷の方に目を向けました。すると，峡谷の奥に寝袋が転がっていました。水桶の上から転がり落ちたのです。私は不安のあまり，寝袋を水桶の上に置いたまま，すっかり忘れていたのです。この寒い山間で寝袋なしに一夜を過ごすとなれば，大変なことになっていたでしょう。だれかがそのことに気づいて，私に知らせてくれたのです。

私は寝袋を拾い上げてから，岩の上に登ってみました。しかし人の姿も見えなければ，何の物音も聞こえません。しだいに，あの口笛がどこから聞こえたのか分かってきました。私はへりくだり，感謝の気持ちに満たされて馬車に戻りました。恐れはすっかり消え去り，落ち着きを取り戻し，私は穏やかな平安「とうてい測り知れることのできない神の平安」(ピリピ4：7)に包まれていました。主が見守って下さっているのです。地上に落ちる一羽のすずめにも，そしてたったひとつの寝袋にも，主はみこころを留めておられるのです。

その夜，杉の枝の上に寝袋を広げて，木木の間を吹き抜ける穏やな風を伴奏に私は心の中で歌っていました。星が耳元で「神は近くにおられます」とささやいているようでした。聖きみたまの平安と神の愛に対する証が私の心を満たしていました。

「今も予言者がいます」と，彼女は言いました

ロザリンド・ジョーンズ

私が初めてこの福音について聞いたのは，病院で夜勤をしていた時でした。数人の職員がある晩，宗教の話を始めました。それぞれ違う宗派で，当然のことながらみんなが自分の教会は真実だと考えていました。私は全部の教会が正しいはずはないと思いながらも，神とキリストを信じさえすればどの教会に行っているかということは問題でないと，自分の意見を述べました。

私はそれまで15年ほどプロテスタントの

教会に通っており，聖書の教えを自分なりに理解して従おうと努めていました。ある日教会の牧師さんが，神はもう予言者を通じて御自身を啓示されることはない，ただ聖書によるだけだとおっしゃったことがあるのですが，それを聞いた時，みたまが他の人に聞こえると思われるくらいはっきり強く，「それは違う」と私に告げました。しかしどういうことなのかわからなかったので，そのことはだれにも言いませんでした。

病院での宗教の話の時，ひとり勇気のある看護婦さんが，教会を導く長として予言者がいるからモルモン教会が真実だと発言しました。「この現代という時代に予言者が？」私は尊大に考え，信じられないという気持ちを彼女に示しました。

すると彼女は「証明できるんですよ」と言い，私に1冊の本を貸して下さいました。モルモン経でした。私はその本を読んで驚き，読み進むうちに，聖書を読んだ時と同じような燃えるものを胸に感じました。そしてこの本が真実かどうか，永遠の父なる神に問いなさいというモロナイの勧告を読んだ時，そうしてみようと決意しました。主が答えを下さるほど私のことを心にかけていらっしゃるとはまるで考えず，ただ神とイエスを信じていたから祈ったのでした。

その晩私は夢を見ました。目の前に聖書と金版がありました。金版は太陽のように光り輝いています。私は夢の中で，両方の書物が正しいこと，でも金版の方が聖書よりもっと確実で純粋なものであることを知りました。目が覚めた時，その夢が証となっていました。それからその看護婦さんは「教義と聖約」を貸して下さいました。それも読み通しましたが，近代になってこんなにたくさんの真理を受けてきた教会なのであれば，ぜひ入りたいものだと思うようになりました。

私は，自分の見た限り白人ばかりの教会で，黒人の私がどう受けとめられるか見当もつかないまま，末日聖徒の礼拝に出席しました。ただ，真実の教会だと思うから出席したのです。でも皆さんはとても温かく，愛をもって親しく迎えて下さいました。

私はふたりの立派な女性宣教師から6回のレッスンを受けましたが，その後夫が私の生活上の変化を理解できなくてバプテスマを許してくれませんでした。キリストの教会と知りながらそこに入ることができないのです。とても悲しい毎日でした。それから8カ月くらいして，私は以前の教会にもう行くまいと決心しました。たとえバプテスマが受けられなくても，断食をし，祈って，末日聖徒の教会に捧げ物をしようと思いました。

それから1年ほど経ったある断食日曜日のことです。夫が私にバプテスマを受けてよいと言ってくれました。その日と，そしてバプテスマの日は，私の生涯で最も幸せな日でした。モルモン経を見せて下さったあの看護婦さんに，感謝の気持ちはいつまでも消えないでしょう。私に永遠の生命に続く道を教えて下さったのです。終わりまで忠実に耐え忍ぶならばやがて神の王国に住むことができることを，私は知っています。

愛がなければ
私たちはむなしい

マリアーン・マイアーズ

6カ月間の研修のために聖地イスラエルを訪れた時，私はひとつ固い決心をしました。この6カ月の間に，本当の意味で霊的な女性になろう，という決心です。数ある目標の中で，私の一番大切な目標はキリストを知るということでした。でも，どうしたらそれを達成することができるのでしょう。私はキリストがかつて住まれた地に立ち，主の歩まれた野山を眺め，主がたとえ話の中で取り上げられた自然界の万物に目を向けてみました。次第に私にもこの地の様子が分かってきましたが，まだほんの一部分にすぎません。私はこの地に着いた時よりももっと救い主について知って帰りたいと思いました。

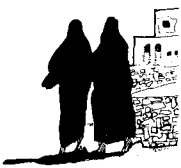
数週間のうちに，私は自分なりに立てたすべての目標について働きかけを始めました。真剣に聖典を学び，教師の話に耳を傾ける時，私はみたまを感じて胸が熱くなるのを覚えました。でも，イエス・キリストを知るという目標だけは何としても達成できそうにありませんでした。そんな時，私はへんぴなアラブの村を観察調査し，そこで奉仕活動を行なう団体に加わることにしました。村人の栄養や健康，公衆衛生について援助するのです。

最初に訪れたのはある難民キャンプで，私はそこで体重が5キロにも満たない1歳の女の子の世話をしました。おびえたしわだらけの体の女の子を抱きかかえた時，私は悲しみに心が沈み，こう叫びたいくらいでした。「教えて，あなたのために私に何ができるの。喜んでそれをするわ。」私が女の子の小さな足首や人形のようなつま先をなでおろすと，母親は私の心の内を読みとったかのようでした。そして女の子を自分の手に取り，母親らしい仕草でその子を抱き締めたのです。その光景を見ていた私の目に，女の子のきらきら輝いている瞳が飛び込んできました。暗く冷え冷えするアドービれんがの家で，たとえ生きるための基本的な必要が満たされていなくても，家庭の中に愛と希望があったからでしょう。

私はそこに腰を下ろし，私たちが生活の中で忘れてはならない最も大切なことは，互いに愛し合うことなのだ，と思いました。イエスは弟子たちにこう言われました。

「わたしは，新しいいましめをあなたがたに与える，互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように，あなたがたも互に愛し合いなさい。

互に愛し合うならば，それによって，あなたがたがわたしの弟子であることを，す



聖地での研修を通して私は霊的にとても成長できたと思います。私は自分にとって最も大切なことは何であるかを，へんぴなアラブのある村の小さな家庭で学びました。

べての者が認めるであろう。」（ヨハネ13：34—35）

こうして私は少しずつ生活の中で救い主を身近に感じることができるようになりました。

岩はだのごつごつした道やアラブの村々が点在する丘を歩いていると，近くの小川から家族の飲み水を頭の上にのせて運んでいる婦人たちを見かけます。これは，イエスの時代から変わらずに続いている婦人たちの仕事のひとつです。私たちが通りすがると，子供たちが群がり，見知らぬアメリカ人を目で追うのです。

私たちの訪問はアラブの家族から，いつも温かく歓迎されました。村人はこれ以上の親切なもてなしはないというほどの迎え方です。私たちは小さな子供たちの体重を測定します。私は片言のアラビア語で，こんにちは，ありがとうと言うよう努力しました。しかし，村人と目が合うたびに，私はこのような人々をまだまだ十分に愛していないことに気づくのです。私が自分のプライドを完全に捨て切れないでいるからです。そういった心のわだかまりを完全に捨てて，深い愛を示したいと思いながらも，どうしてもそこから抜け出すことができないのです。

ちょうどその頃，私たちのガイドを務めているアラブの女性について，とても興味深いことを発見しました。村の婦人たちはすべて立ち止まって彼女に心温まるあいさつをします。中には彼女を抱きしめて愛と友情を伝える婦人もたくさんいます。私はガイドの女性に言いました。「ここの人たちはあなたのことを心から愛しているのですね。」

彼女はうれしさを隠しきれない様子でこう答えました。「マリアーン，それは私が彼らを心から愛しているからです。」私はうなずくだけで言葉が出ませんでした。彼女は，私がその言葉の陰にある意味を考えていることに気づいていたようでした。

ある日，私たちは曲がりくねった道の突き当たりにある，丘のすみの家を訪れました。石造りの小さなその家に向かって歩いていると，家族全員が私たちを出迎えてくれました。父親は，私たちに英語で「こんにちは」とあいさつしようと懸命でした。あいさつがすむと彼は恥ずかしそうな笑いを見せました。私は彼の熱意に思わず「とても上手です。温かい心遣いをありがとう」と言うかのように，彼の手を取りました。

彼の妻はマットを取りに行き，私たちに差し出してくれました。私たちがそれぞれの場所に座を占めると，子供たちが集まってきました。もじもじしながら，私のそばに寄ってきた小さな男の子は，幾度か哀願するような鼻声とかん高い声を上げました。アラブの栄養士が手で合図してくれたところによると，その男の子は「普通の子」ではないということでした。知能が遅れていたのです。そうだと知った私は，私の愛をその子に伝えるために手元に引き寄せました。

私はその子をしっかりと抱きしめて，ほおを伝わる涙を抑えることができませんでした。この家族は，私たちがこれまで訪問した中で一番貧しい家族でした。でも私は彼らが貧しいから涙したのではありません。そのアラブの家族を愛していたからです。私の周囲にはりめぐらされていた壁が取りはずされ，胸が一杯になって泣けてきたのです。

キリストが示された愛とはこのようなものではないでしょうか。

「この愛はキリストの純粋な愛であって……

……神が御子イエス・キリストに真に従う者たちに一人のこらず与えたもうたこの愛で自分たちの胸を満すためにありたけの心をつくして御父に祈れ。これはまた，あなたたちが神の子らとなるためである。神の現われたもう時には神をそのありのままの姿で見るにちがいないから，その時には神に似た者になることができるためであり，また私たちも神のように清められると言う望みを持たんがためである。」（モロナイ7：47—48）

私は飛び上がって喜びの声を上げたいくらいでした。イスラエルのあるアラブの村のマットの上で，私は救い主にさらに近づく方法を見いだしたからです。その時私は何と清らかな気持ちになったことでしょう。私はいつまでもその気持ちを持ち続けたいと思っています。

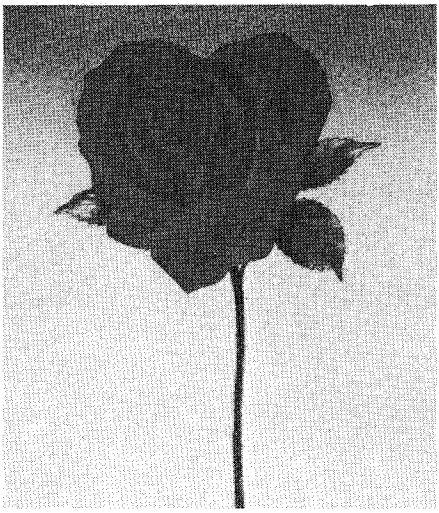
老いた彼らの祖母が私の横に腰をおろしました。彼女は私の愛を感じ取ったのでしょう。私を抱きしめ，ほおに何度もキスしてくれました。たとえ言葉に出さなくても，その部屋には愛が満ちあふれていました。

私はこの家を去りがたく思いました。それ程この思いにいつまでも浸っていたかったのです。私が，もしこの丘に足を踏み入れず，このような愛を抱くことができなかったとしたらどうでしょう。主は，この愛をすべての人に捧げるよう祈りなさい，そうすれば主のようになれる，と私たちに教えられなかったでしょうか。私はこの愛を通して聖められたのです。

私は今，口論したり，軽率な判断を下しそうになったりする時に，アラブの女性の言ったこの言葉を思い出すようにしています。「マリアーン，彼らが私を愛してくれるのは，私が彼らを心から愛しているからです。」

愛の贈り物

エレン・ジェンセン
ジョイス・M・ジェンセン



「どうしたのかしら，これ。」私は寝室に入り，化粧台の上に置かれた花を見て思わずつぶやきました。緑色のコップに黄色のリボンで飾り付けをした花びんは簡単な物でしたが，その中にいけられた赤いビロード製のバラの花は，ひと目見て苦心の作であることがわかりました。

15歳になる娘のエレンが前にこれと同じような物を造っていたことは知っていましたが，いつも友だちへの贈り物などにしていました。どうして私のところへと不思議に思いました。めったにないことなのですが，その日はエレンと口論をしてしまって，心の中にはまだわだかまりが残っていたのです。

私にあてたメモがありました。何が書かれているのかと開けてみると……

「お母さん，これはただのつまらない造花にしか見えないかも知れないけど，それでもきれいでしょう。本物のバラにしなかったのは理由があるの。本物のバラだとかれてしまうけど，これだったらいつまでも同じ，かれたりはしないわ。お母さんへの私の気持ちも同じよ。お母さんのこと，愛してないように見えることも，たまにはあるかも知れないけど，本当は大好き。

このバラはほこりがついても，吹いて落とせばもとのようにきれいになるわ。お母さんと私がけんかをした時も同じよね。ほこりを吹き落としてしまえば，ふたりの間も見違えるようにきれいになるわ。お母さんのこと好きよ。これからもずっと。」

涙がほほをつたいました。私は自分の方から謝りにいかなかったことを恥ずかしく思いました。娘の方から謝ってきたのです。そして，仲たがいしたふたりの間をきれいにしてくれただけでなく，愛のプレゼントまでしてくれたのです。

今でも意見の食い違うことがよくあります。でも今では，そのほこりが本当に取るに足らないもので，それをすぐに吹き飛ばしてしまう方法も身につけました。もしそのようなことがあった時は，相手を理解し思いやる気持ちを心に抱いて寝室へ行き，あのバラにかかったほこりを吹き落とすのです。

「私の意見を聞いても笑わない人と話し合ってみたかった」

デビッド・キャプロン

私はあの時，18歳で高校の3年生でした。

これまでたいして悩むこともなく，自分の思い通りに進んできたような気がします。友達にも恵まれ，スポーツの素晴らしさも知りました。翌年はカリフォルニア大学のバークレー分校に進学が決まっていました。大学の方からはすでに入学許可書が届いていましたから，問題はありませんでした。

その頃，私は春に行なわれるスピーチ・コンテストのことを考えていました。きっと優勝してみせるという意気込みでいました。話のテーマは「親子の断絶は本当にあるのか」ということでした。私は，審査員の好むような話を考えていました。そして

案の定，カレンというモルモンの女の子を敗って優勝しました。

私は審査員が望むようなことを言ったから勝ったのです。しかし，私の心の中では教会の教えに基づいたカレンの話の方がはるかに内容があるように思われました。カレンの話は素直な信仰心の中に私を包み込んでくれました。こうして私たちはすぐに友達になったのです。

お互いに知り合うにつれ，私たちの会話は激しさを増し，時には議論にまで発展することがありました。私が科学について話すと，カレンは一生懸命に宗教を弁護するのです。そんなわけで，話し合いはいつも彼女にとって不満足なものでしかありませんでした。

そんなカレンにネセという友達がいました。彼女とは学校で会ってもあいさつを交わす程度でしたが，私がカレンと話している時にそばでよく聴いていました。

ネセは自分が末日聖徒であることをこれまで私に直接に言ったことはありません。ある日，私が図書館で勉強していると，彼女がやってきました。「ここにすわってもいいですか。」その時の話の中で，彼女は自分がイスラエルの家の一員であることを告げました。彼女は自分がユダヤ人であるということを言いたかったのでしょう。

私たちは自習時間が同じであったため，3年生の残りの数カ月間，ネセと私は心に

そのように私の気持ちを押し留めているものは，永遠進歩の原則だったのです。私はこう言いました。「そんなことはあるはずがない。人が神によって造られ，神のようになるなんて。」

浮かぶ多くの宗教上の問題について話し合うことができました。のちに，彼女はこう言いました。「私の意見を聞いても笑わない人と話し合ってみたかっただけです」と。私が，たとえば死後の世界のような問題について自分の考えを述べると，彼女がそれに対して自分の信条を語るのです。その自信たるや驚くほどです。彼女が末日聖徒であると知ったのは，それからずっと後のことでした。

その頃には，私たちは本当に楽しく語り合うことができました。私は次第に昼食をネセや彼女のモルモンの友達と一緒にするようになりました。彼らが周りにいるだけで，雰囲気が明るくなってくるのです。

タバコは吸わず，人の悪口は言わず，悪い冗談も話題にはなりません。ましてや，人をあざけることなど全くありません。お互いの気持ちを非常に大切にします。別世界の人々と交わっているようで，私は楽しくて仕方ありませんでした。

学年末近くになって，カレンが私をゴールデン・アンド・グリーン・ボールに誘ってくれました。私はそれがどういうものかさっぱり分かりませんでした。これまで教会のダンスパーティーに出たこともない私が，スーツを着込んで行くなどとは！　私は教会の建物の中にある体育館を見て驚きました。

ところがその体育館の中ではもっと目を見張るようなことが行なわれていたのです。大人も子供も一緒になって話したり，笑ったり，ダンスを楽しんでいました。世界中で親子の間の意志の疎通が大問題になっているというのに，ここに集っている人々は年齢に関係なく皆友達だ。なぜだろう。

私はカレンに尋ねました。彼女は，教会だからと答えました。それからカレンは建物の中を案内してくれました。その間も私はカレンの言ったことをじっと考えていました。その晩，家に帰る頃，私はひとつの結論に達していました。それは，彼らが独特な人たちであり，私には理解できない何か特別なものを持っているということでした。彼らにはとてもすばらしいものがあるのです。

卒業した年の夏，私はアルバイトをしました。そのため，親しくなったモルモンの友達ともしばらく会えなくなりました。私はガソリンスタンドで働きましたが，あま

り楽しくありませんでした。一緒に働いている人々の思いやりが欠けていたからです。私は落胆し，孤独でした。

そんな7月のある日の午後，ネセが友達を連れてガソリンスタンドにやって来たのです。私は彼女たちを見ただけで元気が出ました。彼女たちはオークランド神殿で行なわれる野外劇で讃美歌を歌うので，私を招待したいとのことでした。

私はその夜のことを忘れることができません。生まれて初めてジョセフ・スミスの話を聞き，末日聖徒の歴史を知り，彼らに対する尊敬の気持ちがわいてきました。式典の最後に，人々は立ち上がって，「主のみたまは火のごと燃え」を歌いました。私はその歌の歌詞を知りたいと思いました。一緒に歌いたかったからです。私の心の中は尊敬と愛の気持ちで一杯になりました。

人々はゆっくりと家路につきました。私は駐車場に立って，神殿を見上げました。その時心の奥底で，いつの日かあの建物の中に入るだろうという声が聞こえました。

秋になり，ネセはブリガム・ヤング大学に入学するために行ってしまい，私もカルフォルニア大学に入学しました。再び，孤独なさびしい毎日でした。ネセからはいつも週に2，3回定期的に手紙が届きました。私は彼女にモルモンになった理由を尋ねました。すると，封筒一杯に入った次の手紙には，不活発な家族の中にあって活発に教会に出席し，力強い証を維持していくことの難しさについて連綿とつづられていました。

私は教会に行ってみることにしました。だれも教会に行くように勧めてくれたわけではありませんから，これは勇気のいる決断でした。とにかく自分で行ってみるしかないと考えたのです。

教会の入口の扉に手をかけながら，引き返そうかと考えたりもしました。私はそっと礼拝堂に入ると，あいていた後ろの席にすばやく腰かけました。知っている人はだれかいるだろうか。私は礼拝堂の中を見回わしました。

すると，どこからともなくカレンが現われて，私に握手を求めてきました。「お早う，デビッド。」彼女はにこにこしながら言いました。それからはもう心細くありませんでした。カレンは私を教会員たちに紹介し，クラスへ案内し，そしてずっと私のそばに

そうだ！　そうして考えてみると，すべてがよくわかる。……

「そうだ。そうだったのか！」私は飛び上がって駆け出したいくらいでした。

このようにしてジョセフ・スミス記念館の階段の所で，みたまが私に働きかけ，福音の計画について私に証して下さったのです。

いてくれました。

私は，クラスで私が出した質問に対する彼らの受け答えに深い感銘を覚えました。それだけでなく，教師のボラス姉妹はわざわざ私に感謝の言葉を述べに来てくれたのです。「あなたのお陰で，とてもよい話し合いができましたわ。」私はこれほど温かい気持ちを感じたことはありませんでした。

しかし，私はまだ教会員が話すような霊的な証を持っていませんでした。私は教会が好きでしたし，そこで教えていることも信じることができました。しかし，教会が真実かどうか分かりませんでした。それでもとにかく，集会には出席し続けました。

それから1カ月後，ネセが私にブリガム・ヤング大学に来るように誘ってくれたのです。私は待ってましたとばかりにプロボに飛んで行きました。ネセは自分の家の庭でも案内するかのように学校のことをあれこれと説明してくれました。また，キャンパスを歩きながら，私たちの話したことといったら宗教のことばかりでした。私の頭の中には，高校時代に図書館で語り合った時のように，疑問が次々にわきあがってきました。依然として教会のことがおぼろげにしか理解できなかったのです。

そのように私の気持ちを押し留めているものは，永遠の進歩の原則だったのです。私はこう言いました。「そんなことはあるはずがない。人が神によって造られ，神のようになるなんて。」

私たちはジョセフ・スミス記念館の前に立っていました。ネセはしばらくしてこう言いました。「デイブ，私たちは肉体が造られる以前に，神の霊の息子，娘として創造されたのよ。私たちの一部である霊は天父から直接与えられたものなの。」

そうだ！　そうして考えてみると，すべてがよくわかる。私は思わず大声で笑い出していました。喜びを抑えることができなかったのです。頭の中で，教会の教えの複雑な糸が少しずつ解けてゆくのがよくわかりました。「そうだ。そうだったのか！」私は飛び上がって駆け出したいくらいでした。

このようにしてジョセフ・スミス記念館の階段の所で，みたまが私に働きかけ，福音の計画について私に証して下さったのです。その時，私はこの教会に入ろうと思いました。

しかしまだすることがありました。モルモン経を読み，祈り，宣教師のレッスンを受けなければなりません。けれども，あの瞬間から私の生活は変わりました。真理を知り，目的を見いだし，人生で何をなすべきかを教えられたからです。それから5週間後に，私はバプテスマを受けました。

そして1年半の後，私がいつかオークランド神殿に参入する日が来ると感じたことが現実のものとなりました。伝道に出る一週間前にエンダウメントの儀式を受けることができたのです。

伝道を終えて帰ってきた私は，図書館での語らいに始まった旅を，ネセと一緒に永遠に歩み続ける決心をしました。そして私たちはプロボ神殿で結婚しました。

私は妻の姿を見るたびに，「私の意見を聞いても笑わない人と話し合ってみたかった」という強い信仰を持ったひとりの女性に会えたことを，主に感謝せずにはいられません。彼女は私の心を揺り動かし，私の人生を変えてくれたのです。

人生を振り返って，決定を下すのに時間がかかったものを思い起こしてみるとひとつだけ他のどれよりも目立っているものがあります。それは，「伝道に出るべきだろうか」ということです。両親は出るように望んでいました。また監督は，出るべきだと言いました。友達の中には伝道に出る者もいましたが，そうでない者は，止めた方がいいと言いました。彼らは，「考えてみろよ，楽しみがなくなるんだぜ」とか，「学校はどうするんだい」「ガールフレンドは」とか言うのです。そう考えると，あまりにも多くのものを失うような気がして，2年間はあきらめられないと思えてくるのです。一体どうしたらよいのでしょう。

もし，皆さんの中にこれと同じ決定に迫られている人があれば，私は，皆さん自身の心に尋ねてみるようにお願いします。主は，皆さんの心を通して語りかけられるのです。「汝の智と情に告げんとす」（教義と聖約8：2）と主は言っておられます。周りの声には耳をふさいで下さい。それは，簡単にあなたを主の道から引き離してしまうのです。

キンボール大管長は，「若者はすべて伝道に出るべきである」と言っています（『全世界に出て行って』「聖徒の道」1974年11月号，p. 483）。大管長はまた，すべての人が伝道に出たいという強い望みを抱いて成長すべきであると語っています。そのようにすればもちろん，19歳になる前に決心がついているわけですから，それほど難しいことではないのです。私は，キンボール大管長が予言者であることを証します。大管長は，主に代わって私たちに語りかけるのです。熱心に耳を傾けて下さい。そうすれば，あ

あなたの心に尋ねてみなさい

七十人第一定員会会員
ジャック・H・ゴーズリンド・ジュニア

なたの心が何をすべきかを告げてくれるでしょう。

なぜ伝道に出る必要があるのでしょうか。この本質的な質問について考える時に，私の心に幾つかの事柄が浮かんできます。確かに答えは簡単です。主がそのように言っておられるから，予言者が繰り返しそれを強調しているから，また，家族や教会の指導者，その他の人々がそう勧めるからです。しかし，彼らはあなたではありません。私が，自分で出ようと決心した時，あの時は心の底から，それこそ頭のてっぺんからつま先まで爽快な気分になったのを覚えています。主から，自分の下した決定が正しかったという確信を得たからです。自分でもそれが正しいということを感じていました。特に，その時から私は，自分のことばかりではなく，ほかの人々のことを考えるようになりました。さらに，そうすることによって毎日の生活がかけがえのないものに思えてきました。人々に祝福を与えるために自らを捧げることは，自分にとって実りあることです。救い主が次のようにおっしゃったのもこのひとつの理由によるのです。「また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。自分の命を得ている者はそれを失い，わたしのために自分の命を失っている者は，それを得るであろう。」（マタイ10：38—39）

私たちに求められているのは，救い主が背負われたと同じ十字架を負うことではありません。救い主がすべての神の子供たちに示された愛を身につけるよう望まれているのです。もしイエス・キリストが天父のみこころに従って十字架を背負っておられなかったら，全人類のための偉大な贖いの計画は成就されなかったでしょう。しかし，イエス・キリストがその神聖な使命を完うされたことによって，私たちは心から悔い改めれば完全な罪の赦しが受けられるのです。また，全人類の復活に伴って永遠の生命を受けることができます。そして遂には，戒めを守ることによって，日の光栄の王国において天父と御子と共に栄えある受け継ぎにあずかることができるのです。これは，神のあらゆる賜の中で最大のものすなわち永遠の生命です。宣教師として自分の十字架を背負う時，私たちは，どのようにすればその素晴らしい祝福を手にすることができるかを天父の子供たちに教える尊い責任を引き受けます。

19歳の伝道の経験は，同胞に奉仕する機会を与えてくれただけでなく，自分の生活をバランスのとれたものにする上でも大きな価値がありました。これは，ほかの方法では得られなかったものであると確信しています。また，主が私の祈りに耳を傾け答えて下さることを知って，自信と主に対する信頼が生まれました。神権の力を行使し，私と同僚が求道者に証する時の聖霊の力を目の当たりにして，私の福音に対する証はさらに強められました。モロナイが述べている「キリストの純粋な愛」（モロナイ7：47）についても，以前よりずっと深くその意味がわかるようになりました。その愛は，私の心一杯に広がり，そのため私は，自分の心に強く感じている気持ちを難なく表わすことができました。

さらに私は，両親に対して心から愛と尊敬を抱くようになり，彼らに対する信頼は

急速に深まりました。それは，確かに以前にもあったのですが，伝道に出て以来全く違ったものとなりました。私は，同胞を愛することを学び，心を尽くし，勢力を尽くし，思いを尽くし，体力を尽くして，彼らと共にイエス・キリストの福音を分かち合いたいと望んだのです。私は，人生においてあの時ほど福音の意味と福音が持つ力とを感じたことはありませんでした。また伝道部長，同僚，そして私たちが教えてバプテスマを施した素晴らしい家族など，世界中の素晴らしい人々と友達になることができました。さらに，伝道中だけでなく帰還してからも勉学に励むようになりました。聖霊の力によって，不思議な方法で心に助けを得，人々を教えることができました。それにも増して，静かで優しい主のみたまを通して，学業や仕事，そして多くの祈りに対する答えとして，イエスはキリストであり生ける神の御子であるという確信を得ることができたのです。

人々の中には，伝道に出なくてもそのようなことができると考えている人が多くいると思います。しかし，主はそう望んでおられるでしょうか。私は，「若者はすべて伝道に出るべきである」というキンボール大管長の勧告が，すべての人々を指して言われたことであるとはっきり感じています。あなたの心の声に耳を傾け，そして同胞に奉仕する時の幸せを見いだして下さい。

「汝ら，人の値は神の前に大いなることを憶えよ。

而して，悔い改むる人を見て彼の悦びは如何に大いなるか。

これを以って，汝らは今の世の人々に悔改めを叫ばんために召さるるなり。

而して汝らもし……唯一人の人たりともわれに導かば，わが御父の国に於て彼と共に汝らの悦び如何ばかりぞや。

さて，……われの許に導きたる唯一人の人につきて汝らの悦び大いならば，汝らもし多くの人を導き来らばその悦びは果して如何ばかりぞや。」（教義と聖約18：10，13—16）

伝道に出る決心をするのは，時として難しいことです。しかし私は，その選択が正しいものであることを敬虔な気持ちで証します。それは，主が望んでおられることであり，約束と祝福に満ちた戒めでもあります。一見犠牲と思われるようなことでも，伝道の業を通してもたらされる驚くべき祝福と照らし合わせれば，ささいなことに見えてくるものです。主の導きに従ってこの決定を下すことができれば，将来，結婚，学業，就職に伴う決定をもっと簡単にできるようになるでしょう。また，失敗することもずっと少なくなります。そして，次の神の言葉が真実であることを以前にも増して実感できるようになるのです。「お前たちは神の御子でキリストである私らの贖い主の岩を基にしなくてはならない……。贖い主の岩を基にするならば，悪魔がその大風を吹かせて柱のように立つつむじ風をまき起すとき，また悪魔の雹と暴風雨とがお前らを打つとき，悪魔はお前らに打ち勝って不幸の淵と永遠の悲惨にお前たちをひき落す能力はない。なぜならば，お前らの立つ岩は堅固であって人がその上に立つと倒れることのできない基であるからである……。」（ヒラマン5：12）

クリスマスに寄せて

日本・韓国地域代表役員
菊地　良彦

イエス・キリスト様のお誕生をお喜び申し上げます。

昔，ユダヤの野に野宿し羊の番をしていた羊飼いたちに，主のみ使いが現われこう告げました。「……すべての民に与えられる大きな喜びを，あなたがたに伝える。きょうダビデの町に，あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」（ルカ2：9—11）

その後に天の軍勢が多く現われ賛美の声をあげました。「いと高きところでは，神に栄光があるように，地の上では，み心にかなう人々に平和があるように。」（ルカ2：14）

一方，西半球のアメリカ大陸では，ニーファイがその麗しい誕生を予言して，その前日に次のように語っています。「頭をあげよ。元気を出せ。予言の成就する時は近づきたり。今夜そのしるし現わるべし。われはわが聖き予言者らの口を借りて言い伝えたるすべての事を必ず成就せしむることを世の人々に証明せんために明日世の中に来らん。」（Ⅲニーファイ1：13—14）

このイエス・キリスト様は，1820年の早春，少年ジョセフ・スミスの前に天父なる神様とともにみ姿を現わされました。

こうして1830年にすべての神権の鍵の下に回復された偉大な神の王国。その王国の会員として私たちは今年たくさんの祝福をいただきました。日本の民に神様のあらゆる奥義と光が顕わされる日が今ここに来たのです。2カ月前，神の予言者スペンサー・W・キンボール大管長はこの日本の地を訪れて，東京神殿を献堂して下さいました。この主の宮居では次のような儀式が行なわれます。

「この故に，われ誠に汝らに告ぐ，汝らの灌油の儀，汝らの聖なる洗い，死者に代る汝らのバプテスマ，汝らの聖会またレビの子らに由る汝らの捧物の記念，神よりの交通を受くる最も聖き所に於ける汝らの神託，汝らの律法と審判，啓示の始まりと，シオンの基と，シオンのすべての市制の栄と誉とエンダウメントは，わが聖き名のために建てよとわが民の常に命ぜらるるわが聖なる宮居の儀式によりて制めらるるなり。」（教義と聖約124：39）

私たちはこのイエス・キリスト様が枕してお休みになられる「主の宮居」東京神殿に参入し，聖なる宮居の儀式にあずかれるよう自分自身を備えなければなりません。

天の軍勢が言われた「地の上では，み心にかなう人々に平和があるように」という言葉が，日本の聖徒の中に成就され，聖徒の家庭に，教会に，心の中に真の平和が確立され，とこしえに続きますよう心からお祈りいたします。

来年は日本の末日聖徒の黎明期となることでしょう。

東京神殿
献堂の祈り

1980年10月27日(月)

大管長　スペンサー・W・キンボール

在天の御父よ，諸々の天と地と，また地上の万物を創造したまい，完き慈悲と愛と真理に富みたもう，いと聖き御方なる御父よ，汝の愛する御子イエス・キリストのみ名により，我らは本日，生ける神なる汝に捧ぐべくこの神聖なる建物に会したり。我らは，汝と汝の御子を愛する東洋の聖徒たちの犠牲により備えられしこの美しき神殿を，今汝に捧げ奉る。

我らは，汝がこの地上に汝の生みたまいし独り子を我らの救い主として送りたまいしことを感謝し奉る。また，この最後の神権時代に，汝が前世にて召したまいし予言者ジョセフ・スミスを遣わし，福音の回復を得させたことを感謝し奉る。汝と汝の愛する御子が御自ら親しくジョセフ・スミスに顕われ，再び諸々の天を開き，世に汝と汝の御子のことを知らしめたまいしことを，また汝の聖なる神権の権能により汝の教会と王国を完全に打ち建てたまいしことを感謝し奉る。

愛に満ちたもう御父よ，汝は我らが，生者と死者のために栄ある救いの業を行なう場所としてこの地上に数多くの聖なる神殿を建て，それを汝に捧げることを許したまえり。この美しい日本の地に建てられしこの麗しい，設備のよく整いし神殿はそのひとつなり。我らはまた，現在他に10を数える神殿が建設さるる予定なること，すなわちやがて全世界に30にものぼる神殿が建立されんことを感謝し奉る。

聖なる御父よ，我らは汝が末日の予言者たちに霊感を下し，生者と死者双方のために神聖な儀式が執り行なわれるこれら数多くの神殿の建設を得させたまいしことを感謝し奉る。

また，御父よ，汝の教会の組織が今日完全なることを汝に感謝し奉る。なにとぞ，汝の教会の大管長会に，汝の民が恵みと祝福と幸せにあずかるために必要なよろずの事柄について，汝のみ旨とみこころとを示したまえ。限りなく発展を続けるこの地上の汝の王国で霊感に基づく指導を行なえるよう，大いなる知恵を大管長会に与えたま

え。

汝がこの時代に全人類への汝の予言者として召したまい，この世で多くの歳月を過ごしたる汝の僕を，愛をもって見守りたまえ。また，僕の寿命を延ばし，聞く耳を与え，健康と強さを授け，また汝の民を導くに必要なりと汝がおぼしめす力と賜を与えたまえ。

汝の特別な証人なる十二使徒に，汝の聖きみたまを豊かに授け，また先を見通す力と判断と知恵とを与えたまえ。

我らの御父よ，我らは数多くの祝福にあずかりしことを感謝し奉る。世界各国において福音の伝道の業に携わる3万人を越える献身的な宣教師の故に，汝に感謝し奉る。なにとぞ彼ら宣教師に知恵と信仰と献身の思いを授け，彼らが世界至る所に住む真理を求める人々，誠実な心を持つ人々に福音を伝えることを可能ならしめたまえ。彼らの働きに喜びを，彼らの愛の業に成功を得させたまえ。

汝の福音の伝わる道に横たわる障害が取り除かれ，汝の真理が全地にあまねく行き渡り，汝の御子なる救い主により指示されしごとく，あらゆる国民，民族，国語の民，人々が救いと昇栄のおとずれを耳にできるよう，諸々の国の為政者，全世界の政府に汝の感化力を及ぼしたまえ。

御父よ，汝のすべての聖徒たちの家庭に平安を宿らせたまえ。汝の民の中の貧しき者，乏しき者を祝福したまえ。未亡人や孤児，孤独なる者，心ふさぎたる者の叫びに心をとめたまえ。

在天の御父よ，汝に特に祈り奉る。全世界のシオンの若人たちを祝福し，支えたもうように。彼らを悪から守り保護し，邪悪な者，下心ある者たちの言葉や業から守りたまえ。御父よ，汝の民をして永遠の生命に通ずるまっすぐな狭き道を歩ましめたまえ。足下の落とし穴から彼らを守りたまえ。我らの子供たちに，この業が神の業であるとの証を増し加えさせたまえ。また彼らを清さと真理の中にとどめたまえ。なにとぞ我らをして，シオンの若人たちに，汝の聖なる神殿での永遠の結婚を望む気持ちを起こさせたまえ。

教会の姉妹たち，我らの妻，母，娘たちに，尊い召しと責任を果たす気持ちを豊かに得させたまえ。御父よ，汝は我らが彼女たちに抱く深き愛を知りたもう。それ故，必要な折々に，彼女たちに知恵と信仰と知識の貴き賜を授けたまえ。

慈愛深き御父よ，この神殿に来たる者すべてが謙虚な心を持ち，清く汚れなき状態で参入できるようになしたまえ。我らはこれらの聖徒の献身と信仰，また清くあらんとの決意と努力の故に汝に感謝し奉る。

聖徒たちがエンダウメント，結び固め，結婚，灌油，その他の儀式のためにこの聖なる宮居に来たる時，彼らを祝福したまえ。この神殿を，祈りの家，断食の家，信仰の家，栄光の家，永遠の結婚の家，結び固めの家，また汝の家，神の家となし，ここにおいて，生者と死者の双方の救いのために，汝の聖なる救いの業を行なわせたまえ。

我らは汝に祈り奉る。この神殿の神殿長会，神殿長夫人，また儀式を執り行なうすべての人々を祝福したまえと。彼らに知恵と，識別の賜を授けたまえ。彼らがこの建物の内に聖なる雰囲気をかもし出し，すべての儀式が愛と心温まる霊的な思いの下に執り行なわれんことを。またここにとどまりたいとの望み，度々帰り来らんとの大いなる望みを聖徒たちに抱かせることを可能

ならしめたまえ。

また保安や管理に携わる人々，機械室やランドリー，食堂，その他この神聖な建物の施設で働くすべての人々を祝福したまえ。また，この宮居の建設に携わり，その力を尽くして建築の完成に寄与せしすべての人人を，汝の慈悲をもて覚えたまえ。

我らの聖なる御父よ，我らはこの日を歓呼をもて迎う。汝が我らにこの神殿の完成を得させ，我らが長らく待ち望み，努力を傾け，祈り願いしこの日を迎えるを許したもうたことを，汝に感謝し，汝を喜びをもてたたえ奉る。

今日，我らはこの聖なる神殿を，これに伴うすべての物と共に汝に捧げ奉る。汝の栄光をこの宮居にとどめ，汝の聖なる力を絶えず注ぎたまえ。我らの救い主なる汝の愛する御子のとどまる所となし，また汝のみ前に立つ天使たちが聖なるみ使いとして訪れる所となしたまえ。

汝のこの宮居の入口より入り来たるすべての人々が汝の力を感じ，汝がこの建物を聖別し，汝の家，聖なる所となしたまいしを知るようになさせたまえ。

在天の御父よ，我らは汝に祈り奉る。この建物の基礎より尖塔の最先端に至るまですべてを受け入れたもうように祈り奉る。

我らは汝に祈り奉る。壁や仕切り，床，天井，屋根，エレベーター，階段，扉，窓，その他の通路，照明や暖房，衛生設備に関わるすべての物，またこの宮居での聖なる儀式で用いられる，あるいは儀式に関わるすべての物を聖別したもうように。とばりや聖壇，バプテスマフォント，またフォントを支える牛の像を聖別したもうように。

家具や椅子，錠，掛け金，その他この神殿に見いだされるすべての設備と付属品，装飾品のすべて，塗装部分や金属部品，あらゆる種類の見事な木工細工，金属細工，刺繍品を聖別したもうよう汝に祈り奉る。

おお主よ，この神殿の立つ敷地を聖別したまわんことを。また塀や歩道，この敷地に育つ樹木や草花，かん木を聖別したもうように汝に祈り奉る。美しき花が咲き，すべての人々に心温るものを感じさせ，平安と安息を深く心にもたらす所となさせたまえ。その美しさがこの栄えある神殿の業に神聖さと清さを加えるものとならせたまえ。

御父よ，この建物を，あらゆる損傷から，また火による破壊から，洪水など自然の災害から，落雷から，暴風雨から，地震から，その他あらゆる種類の害悪から守りたもうよう汝に願い奉る。

エライジャの霊を我らに授けたもうよう祈り奉る。我らが死者の贖いに携わり，また始祖に至るまで，汝の聖なる神権によりつながれし切れ目なき輪の中に先祖と結ばるようになしたまえ。

我らの御父よ，我らは汝を崇め奉る。汝に栄光を帰し奉る。汝を拝し奉る。日ごとに汝を崇め，汝に感謝し奉る。我らは汝の御子にして我らの救い主なるイエス・キリストのみ名により，我らがへりくだり願うこれらの嘆願を聞き届け，この聖なる汝の宮居を受け入れたもうよう汝に祈り奉る。

汝より授けられし聖なる神権の力により，我らはこの建物と，これに属するすべての物を，我らの聖き御父なる汝に奉献し奉る。而して，この宮居に汝の祝福のあらんことを。汝の愛する御子にして我らの贖い主なるイエス・キリストの尊きみ名により奉献し，願い奉る。アーメン，アーメン，アーメン。

新しく組織されたステーキ部長会

去る10月23日に日本沖縄ステーキ部，同じく26日に日本町田ステーキ部，11月2日には，日本仙台ステーキ部，日本名古屋西ステーキ部が相次いで組織されました。ステーキ部長会は以下の通りです。

日本沖縄ステーキ部

ステーキ部長
長嶺　顕正

第一副ステーキ部長
当真　陸男

第二副ステーキ部長
大城　朝次郎

日本町田ステーキ部

ステーキ部長
青柳　弘一

第一副ステーキ部長
黄木　信

第二副ステーキ部長
小林　整功

日本仙台ステーキ部

ステーキ部長
船山　重憲

第一副ステーキ部長
藤村　康男

第二副ステーキ部長
上野　道男

日本名古屋西ステーキ部

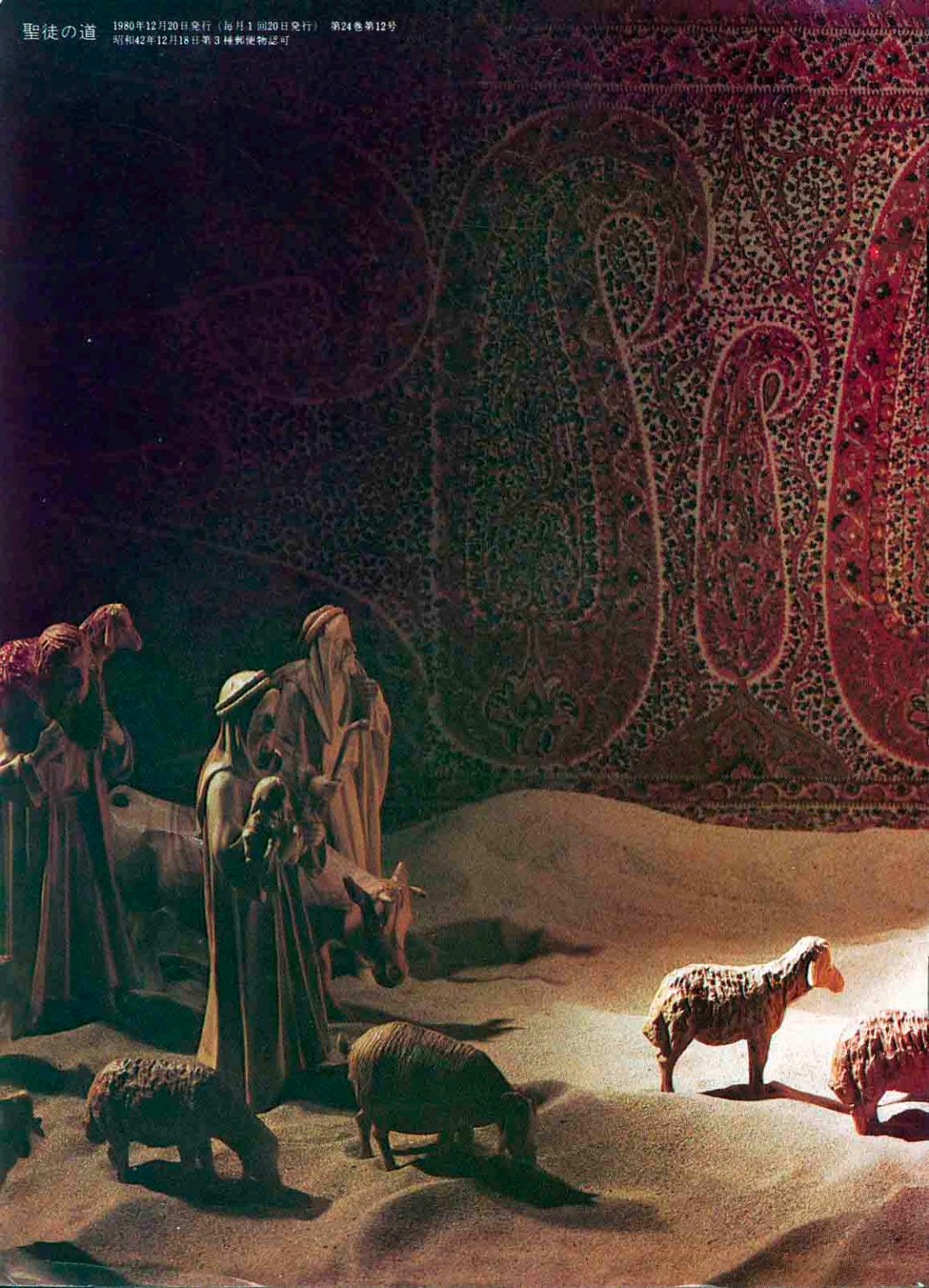
ステーキ部長
中村　武史

第一副ステーキ部長
古芝　健三

第二副ステーキ部長
大橋　稔郎

お詫び訂正

◦10月号，p. 16，アジアに住む聖徒数約8万とあるのは約13万。

◦11月号，p. 45，松下幸之助氏が松下電器(株)の会長とあるのは相談役の誤りです。お詫びして訂正いたします。

聖徒の道　1980年12月20日発行（毎月1回20日発行）　第24巻第12号
昭和42年12月18日第3種郵便物認可